［研究ノート］

「アズマ戦記」

藤田　秀

〈目　次〉

§1　はじめに
§2　西高東低の文化
§3　関東の蛮風
§4　平山一族
§5　江戸っ子はオポチュニストのドリフターズ

§1　はじめに

1990年は，徳川家康の「江戸御討入り」400年記念とのことだった．さらに1995年は，アメリカ軍の「東京進駐」50周年記念にもあたった．それで，八重洲ブックセンターへ行くと，ケバケバしい本がたくさん並んでいた．いつになったら止めるかと思っていたが，なかなか止めない．それでこちらも，少々買い込むことにした．

まず本の後にある「著者略歴」の欄を見る．この欄のないものは相手にしない．それは「暗闇から矢を射る」雑兵だからである．自分の形勢が悪くなれば，「イジメダア・イジメラレタア！」と被害者を気取るに決まっている．

第二に，「東京生まれ」とないものは除く．これは「よそ者を排斥する」ためではない．これから，「コテンパンにやっつけてやろう」ということなので，手心を加えないためである．「東京生まれ」でないと「ケンカのルールを知らない」ので，お話にならない．ゲンコツで殴り合っているときに，ナイフを持ち出したりするのはこの手合いである．

第三に，1930年代までの生年月日でないものは除く．これは，終戦当時に少なくとも中学生くらいでなかった者は，「どうせ何もわかりはしない」からである．

第四に，（これが一番重要であるが）東京大学などの『一流大学卒』でない者は除く．さらに，研究所など，『国立機関』に勤めた経歴があれば，理想的である．これは，「高学歴偏重」のためではない．コイツラこそ，韓非子のいう『五匹のウジムシ』の中の『学者』というカテゴリーに属する「ブランド品」だからである．

韓非子にはこうある：

「学者どもは，今になっても昔の聖人をたたえ，『仁義』を借用し，服装や言葉を飾り立て，現行の法に異議をとなえ，君主の心を乱している」．

現行の法に異議をとなえ，君主の心を乱すというのは，韓非子の時代だか

らそう言うのである．これは当然，「デモクラシーに異議をとなえ，世間の人の心を乱す」ということである．

とにかく，かくて数冊の本が残った．かなりな額を払った．家に帰ってゆっくりと眺めると果たせるかな，あることないこと，好きなだけ並べ立てていた．気が楽になった．「ようし！　こっちも好きなだけやってやる！」．また別の手合いは，『記録にないことは存在しない』という，コチンコチンの『アカデミズムの錯覚』で武装していた．こういう手合いなら良く知っている．ジークフリードの槍はどこに刺さるか．「今に見てろ！」．とにかく，「言葉を飾り立てている」相手として不足はない．「弱い者いじめ」と言われる心配もない．

§2　西高東低の文化

アズマ文化に対して，「トラブルを生む厄病神」はいつも西からやってきた．「トラブルが多い」ということは「文化が高い」ということであるから，日本の文化は，疑いもなく「西高東低」である．この「厄病神自身」はどこで生まれるのか，いつも知りたいと思っていた．それが，この間の阪神大震災でとうとうわかった．「門戸厄神（モンドヤクジン）」という，トンデモナイ地名の場所があることが，テレビで放映されたのである．“The Gate of Evil-God”という所である．地名というものは，長い風雪に耐えて，伝わって来ていることを忘れてはならない．

門戸厄神発の厄病神の第一号は，「ヤマトタケル」という名の，強度な分裂気質のオノコである．かれは，「クサナギノ剣（ツルギ）戦闘隊」いう名の「抜刀隊（バットウタイ）」を引き連れていた．「クサナギノ剣」と言うのからして差別用語である．「マツロワヌ者ドモ」を「草のようになぎ倒せ」という意味である．

クサナギノ剣は「直刀・両刃の剣」であったから，振り上げるのは危険である．相手に上から叩かれれば，自分の頭の上に刃が落ちて来る．それでヤ

マトタケルにかぎらず，「壬申の乱」のときでも，皆，もっぱら横に払ったり，縦に突いたりするのが「斬り合い」であった．これに対するアズマの住人は，何も武器をもたぬ「非武装」で，のんきに暮らしていた．しかも，彼らは「鉄剣」というものを初めて見た．

『歴史は，書き手の文化によって左右される』．『歴史とは知識ではない』．『歴史とは歴史家の創作である』．『だからこそ，歴史は書き替えられるのである』．

たとえば，ヤマトタケルが「相模の国」に来たときには，『沼のほとりでピクニックをしましょう』と誘われた．しかし彼には，「相模語の日常会話」がまるでわからなかった．イライラしていると，野原に火の手が上がったのが見えた．「水田農耕文化圏」からきた彼は，「焼き畑農業」というものを知らなかった．それでたちまち『ダマサレタ』という，分裂気質特有の，強い被害妄想に陥った．すぐさま「クサナギノ剣戦闘隊」に命令して，まず身の回りの草を切り払った．見ると，遠くでは大勢が手を振ってわめいている．『早く逃げろ』と叫んでいるのが，彼にはわからない．『アホ・スカタン・オガリおるな！』と確信した．それで切り払った草に「迎え火」を放った．迎え火がついたということは，自分たちが風上にいたことの，何よりの証拠である．しかしこの物語の著者，オオノヤスマロ（太安麻呂）は，そんな空気力学は知らなかった．

火にあおられて血がのぼったヤマトタケルは，逃げまどう「国のミヤツコら」を刺し殺し，村に火を付けて焼き払った．それでその地を「焼津（ヤキツ)」ということにしたという．このとき，なにやら「ねずみ」が出てきて，「穴にもぐれ」などと教えたという話をする向きもあるが，彼らの正史・『古事記』には，ソンナコトハ書イテナイ！

「国のミヤツコ」というのは，ヤマトが任命した「知事」である．マツロワヌ者にはあたらない．それで『学者』は突然アカデミズムを放り出し，

「地方の豪族であろう」などと勝手なことをホザク．相手にしないことだ．学者の変節など，『ザラにあること』なのだから．

『古事記』は，「万葉がな」を並べた，いわゆる「コジキガキ」であると思っている人が多いらしい．今日でも，漢字が書けず，カナばかりを並べた手紙などを「乞食書き」というくらいである．トンデモナイ！　彼らの文化は高い．筆者のような素人が見ると立派な漢文に見える．ところが，「文章の専門家」は昔から，こういうものを「和化漢文」といって軽蔑して来た．今日流にいえば，“Japanese-English”である．ついでながら，日本人は『正しいJapanese-English』を知らないから，ここで一つご紹介しておこう：

“You eat, lunch woh, me toh meat, OK ?”　“Aha! OK!”
“ユーイート・ランチ　ヲ　ミー　ト　ミート・オーケー？”　“アア！OK！”

戦後すぐにGIと一緒になり，渡米した人である．立派に気持ちが通じて，今もハッピーに暮らしている．（モンクアッカ？）

古事記の漢文には，文法上の混乱もあるという．文法的間違い（syntax error）というのは絶好なえじきである．もし，当時レフェリーという制度があったならば，当然，『安麻呂 vs レフェリー』の激しいヤリトリが始まったであろう．その結果，「古事記」は，今日みるようなものでは，到底あり得なかったはずである．つまらない，有ってもなくても良いような，『毒にも薬にもならないもの』になったことは確実である．「近頃の若い人は，まるで文章が書けない」といって，嘆いたり怒ったりするオジンが，今でも時々いる．その伝統はこんなに立派なのだから，はやく諦めるべきだ．

ヤマトタケルの一行が「走り水」にやってくると，波が荒くて前進できない．突然「オトタチバナノヒメ」というギャルが現れる．それだけではない．

どこで集めたのか，「菅畳み8枚．皮畳み8枚．絹畳み8枚」を重ねた上で，ギャルは海に入る．もちろん溺れた．それでやっと荒海が治まって，前進できたという．

この不思議なオハナシは，例によって，ヤマト一流の『敗戦と死を美化する』オハナシである．今の「走り水」には「防衛大学校」がある．つまり，ここは昔から，知る人ぞ知る，並大抵な土地柄ではないのである．しかしヤマトタケルは，アズマの田舎の風土などには，「知識も関心も」なかった．それで，ウカツにも，船に乗って（といっても丸木舟であるが）繰り出した．どうせ，当時のアズマには丸木舟しかなかったのである．アズマ人たちは，まだ「縄文時代」をノンキに暮らしていた．

アズマ文化には丸木舟が発達していた．東京湾の制海権は彼らのものであった．もちろん，彼ら「非武装の民」には，「制海権」という軍事用語はなかった．しかし，その代わりに，「生活圏」という概念があった．毎日少なくとも一回は，東京湾を横切って往復し，貝類の集配・化工をして暮らしていたので，カヌーイングは得意だった．もちろんカヌーだけではない．フォー，ナックル・フォー，エイト，カッターなど，機種も豊富だった．そこへ，『日の照るところは，み～んなオレのものだ』という，チンプン・カンプンなことをいうオノコが「走り水」に現れて，対岸の仲間が大変迷惑しているらしいという情報が入った．

『日の照るところはみ～んなオレのものだとは，どういうことかしらん？では，夜はどうなるんだろう？』と，相談してみたが誰にもわからない．それだけではない．なにか少しでも気に食わぬことがあると，まるで魚でも取るように，人間を細い棒でつき刺すという．すると，驚いたことに，アッという間に死んでしまうという：

「それが，キチガイにハモノということでは，ねえだか？」

「うンにゃ，わがンねえす」
「どにがく，行ってみべ？」

ということで，皆一日仕事を休んで「走り水」に漕ぎ渡った．着いてみると，噂どおり，「クサナギノ剣戦闘隊」が，10杯以上の丸木舟に分かれて乗っている．皆すでに非常にエキサイトしていて，『ウチテシヤマーン・オーッ！』という歌をうたっている．

そこへ，「なんだっす？」と言いながら，舟を横づけにすると，たちまち「プス・プスッ」と5人ほどが胸を刺された．皆，真っ赤な血を噴きながら船底に倒れ込んだ．

「おンどりゃ，なぬすんだかっ！」
「あむねえ・あむねえっ！」
「よるなあ・よるんでねえっ！」

と大騒ぎになった．皆がオールを使って，夢中で丸木舟を押し返した．ヤマトタケルは，一瞬にして自分のミスに気が付いた．オールのほうが長くて，「クサナギノ剣戦闘隊」の切っ先が届かないのである．しかも舟の上では，フット・ワークを利かした，得意の『一撃離脱』の殺法がつかえない．丸木舟はローリング（transvers-rotational-mode）に弱いので，グラグラと舟が揺れる．「海戦」の経験のない隊員たちは，皆あわてて，狭い丸木舟の上で，いっせいに立ち上がったからたまらない．ギャーッと叫ぶと，ドボン・ドボンとつぎつぎに海に転落した．無敵の「クサナギノ剣戦闘隊」は，泳ぎを知らないツワモノばかりだった．海水を吸い込んで息をつまらせると，しばらくは，水面を叩いて無残にもがいていたが，やがてそれも急に静まり，あっというまに水面下に消えていった．

まるで悪い夢でも見ているような，悲惨な光景に，ヤマトタケルの血は凍った．ふとわれに返ると，「オトタチバナノヒメ」の他には，誰も残ってい

ない．陸にいる「歩兵軍団」は，ジベターリアンのように，皆ヘタヘタとジベタに座り込んでいる．タケルの丸木舟の漕ぎ手までが，彼らを捨てて逃げていた．「ンで，なんするだっぺ？」と，遠巻きに見守るアズマ人たちの丸木舟の前に，やがて不思議なギシキが始まった．

『オナゴガオルサカイ，こないなことになったんヤ！』と皆が騒いでいる．『ほな・ワテ・ハナシツケタルサカイ！』と叫ぶと，オトタチバナノヒメは畳に乗り移っていった．「アリャ，おンぼれるずらあ！」と，アズマ人たちが驚き叫ぶ暇もなく，ヒメの姿は海に消え，ギシキは終わったらしい．アズマ人たちは，皆鼻白んで黙りこくった……．

舟を漕いで東京湾をもどりながら，くちぐちに，

「ありゃなんだったなす？」
「なんだったべなあ？」

と，皆がいぶかるなかにあって，少しヤマトコトバのわかるものがいた：

『アノ・オナゴノコんダカ？　アラ・イテコイデスワ！』と彼は言った．しかし，何のことか誰にもわからなかった．

もっとわからぬことがあった．オトタチバナノヒメの辞世の歌である．彼女はこう歌って死んだ；

『佐泥佐斯　佐賀牟能遠怒迩　毛由流肥能　本那迦迩多知弖　斗比斯岐美波母』

サネサシ　サガムノオヌニ　モユルヒノ　ホナカニタチテ　トイシキミハモ

この歌『古来難訓』（コライ・ナンクン）である．学者はいう；

『相模の野原で，燃える火のなかに立って，呼びかけてくださったあなたは，どうなさったろう』(なんのこっちゃ？)

ニーチェは言っている；

『学者はすでに誰かが考えたことに対し，ヤー（イエス）だと言ったり，ナイン（ノー）と言ったりする．つまり批評する．そのことに力のすべてを使い果たしてしまい，自分では何も考え（られ）ないのである』(「この人を見よ」より)

難訓は『サネサシ』にある．これを，そのままホカッテあっては，解いたことにならない．一応ナルホドネと思わせるのが，仙覚和尚の説である．彼は，『これは印刷所のミスプリであろう！　原稿には「サネ・サネシ」とあったにちがいない！』という．ナールホドね！　しかし，その先がアカンかった．『「サネサネシ」は，当時の，相模の枕詞（まくら言葉）であろう』ときた．

われわれが使い込んでいる日本語の特徴は，『主語なし言語』である．それだけではない．実は，『主語なし・直接目的・間接目的・補語なし・その上に，時間なし言語』なのである．では，何が残るか？　『動詞』である．ただし，『人称変化』はない．

西欧人が日本語の勉強を始めると，『これで意思の伝達ができるの！』と一様にまず驚く．ことにフランス人は気が早いから，『スネパ・ポスイーブル！（不可能だ)』と言って投げ出してしまう．「まてまて，猫を見よ．“ニャゴー？”“ニャーゴ・ニャーゴ！”で立派に通じているではないか！」と教えてやると，とたんに180度意見を変えて，『ブザベ・レゾン！（お前のほうにリクツがある：「ソノトオリダ」の意)』と言って，今度は強烈な日本ビイキになる．

ではオトタチバナノヒメはどんな動詞を使ったのか？　見てのとおり，

『問いし君はも』の『問う』である．オノコがオナゴに『問う』ことは何か？　それは決まっているじゃありませんか！　ヤマトタケルは，火に煽られて血がたぎると，やけになって草を切り払いながら，隣にいたオトタチバナノヒメにこう言ったのです；

『どや，今晩，え？　かめへんやろ！』

ヤマトのオナゴは『ウイ』などとは言わない．『アホウ！』と返事をしたに決まっている．『決まっていることは書かない』のが，昔も今も『日本文学の真髄』である．

では，歌の解釈はどうなるの？　それはこうであろう；

『ナンドモ・ナンドモ・寝た（サネサネシ）・アノ相模の野原では，燃え上がった火のなかで（サエ），アンタハ聞いてくれたわヨネ！』［どうです？］

ところで，ヤマトタケル軍団の壊滅・敗走説には，反対したい向きが多かろう．では，すこし追加をいたしましょう：

第一に，七日の後に『ヒメの御櫛が海辺についた』とある．この『七日』というのが，著者・太安麻呂のセンチメンタルな作り話である証拠である．彼はすでに『仏教にカブレテイタ』ことがわかっている．今日でも人が亡くなると『七日間何をするか』．皆様のほうがよくご存じでしょう．

第二は，この『海辺』とはどこかである．どこでも良いが，千葉県側では有り得ない．走り水から千葉県に，櫛が流れ着くような海流は東京湾にはない．したがって，文献を信じれば，タケルは傷心を抱いて，七日間三浦半島にいたということになる．

第三の，最も重要な論点は，ではタケルはその後千葉県側に渡ったか，ということである．古事記には，その形跡はどこにもない．『その後入り進んで，アラブル・エミシドモを，ことごとく従えた』とあるだけである．要す

るに『全部勝ちました』というだけのことである．ここでの問題は，『どこで勝ったという，具体的な地名がない』ということである．シーザーの「ガリア戦記」を見てもわかる．勝ち戦のばあいには『どこで，こんなに勝った』と，地名を明記するのが『軍人の心理』である．彼らは，勝ったときには『単純明快・正確率直な人物になる』のである．「初めての所だから，地名などわからなかったのだ」と言いたいのでしょう？ それが『学者ブッタ言い分』というものだ．そういう場合には，職業軍人は自分で命名します．すでに「焼き津と言う」（ツは「完了」の助詞）と言ったのを，もうお忘れか？

現代でもそうである．アメリカ・イギリスの連合軍がフランス・ノルマンジーに敵前上陸したときには，フランス海岸一帯は，あらかじめアメリカ式に命名してあった．UTAH Beach, OMAHA Beach, COLD Beach, JUNO Beach, SWORD Beach，などがそれである．総司令官アイゼンハウワーは，兵士にフランス語をマスターさせてから攻め込もう，などとは考えなかったのである．「勝ち戦」とはこういうものである．つまり安麻呂は，『戦勝報告を何も受け取っていないから，具体的に書けない』のである．もちろん他の報告，つまり壊滅・敗走のニュースは，ヤマトに『最高マル秘情報』として届いていたにちがいない．

『壊滅・敗走』した証拠には，「勝った話」をソコソコに切り上げると，急に帰りのハナシに話題を変える．すると，場所も「足柄（アシガラ）」と再び具体的にわかりやすくなる．箱根の北側と御殿場との間に，「足柄峠」というのがある．足柄峠は乙女峠と並んで，古来から「万葉道」があったと言い伝えのある所で，話は非常にリアルになる．ヤマトタケルはそこで坂の上に立つと，「阿豆麻波夜（アズマハヤ）！」と，三度嘆いたという．これがまた意味不明で，古来から「学者ども」が飯の種にしている．

一番ロマンチックで，皆に好かれているのが，日本書記流の「東南を望み嘆いた」という説である．そこには「海が見えた」ということが暗示され，オトタチバナノヒメのことを『アア・カノジョオ！』と呼んだのだという．

一番「食い気の張った」上方流の言い方は，実は食事中だったという説で

ある．事実，古事記にはそう書いてある．食事中に，突然「白い鹿」が現れた．それで，食べ残しの「ニンニク」の切れ端で鹿の目を打つと，鹿はたちまち死んだ．それで「坂に登り」，(鹿のことを)「アア，カワイソウナコトヲシタ」と嘆いたのだという．

ここからが「学者ども」の出番である．「古来，『邪悪・害獣などは，ニンニクなどの異臭の強いもので追い払うことが行われていた』ということが知られている」などと来る．なるほど，いまでも「韓国料理」にはニンニクを利かす．だとすれば，『ヤマトタケルは，渡来人だったのだ．彼はグルメだったのだ』とでも言いたいのでしょう．

しかし古事記のなかでは，オオノ・ヤスマロはこう語っているだけである：

「鹿の目に当たって，たちまち打ち殺した．『故（カレ），その坂に登り立ち，三度嘆いて，アズマハヤと詔（ノ）らしき』」．

ヤスマロは素晴らしいライターだ！　彼の文章の秘密は，容易には解けなかった．筆者は，この作品の解釈をめぐって，シロウト情報部員のように，『解読』におよそ一年間を楽しませてもらった．しかも，この『世界初の新説』による説明には，二つの長い回り道が必要であった．突破口はここの一行にある：

第一の問題は，『人は，いかなるばあいに嘆くか』である．いささか回りくどいが，ほかに適当な例が見当たらないので，お許しをいただきたい．アメリカに，ファインマンという理論物理屋がいた．アメリカの物理屋は，たいていヨーロッパからの「輸入品」だったが，彼は「アメリカ産」だったので，若い学生に特に人気があった．業績も上々で，ノーベル賞も取った．アメリカのことだから，いたる所に彼の足跡があるが，1960年代には，キャリフォルニア大学のバークレーにいた．日本にいては信じられないくらいの人気で，教科書もよく売れ，講義の映画フィルムもたくさん出回っていた．

イリノイ大学の大教室では，週末になると「ファインマン物理学」の講義フィルムを上映する．映画なのに，学生がピイピイと口笛を吹き，ドッと大きな拍手を送る．なかなか見せる．内容は特に高度と言うわけではないが，指の表情が実にいい．しかしこちらは日本人．次第におおげさなジェスチャーに飽きてくる．一時間の講義が終る頃には，『ヤハリ・オッチョコチョイだナ』と思えてくる．やがて（何を書いても売れたからだろうが），戦時中に，彼が「マンハッタン計画」に参加していた頃の話が本になった．読んでみると，もう若いときから，「軽薄な人士」だったことがわかる．アメリカ人は皆ガムを噛み，やたらと肩をすくめると思ったら，それはまちがいだ．真面目で静かな人は，いくらでもいる．その「軽薄」な彼にも，20歳代の初期から，もうフィアンセらしき彼女がいた．しかし，彼女は「直らない病気」にかかっていた．ガンではないらしいが，珍しい難しい病気であるという．

一方，彼ファインマンは，大学を卒業し推薦を受けると，喜んで，すぐにロスアラモスの砂漠のなかの秘密研究所に行き，原爆の理論的開発グループに参加した．他方，彼女の方は，そこからおよそ100マイル（160キロ）離れた，アルバカキーという街の病院に入った．週末になると，友人のクルマを借りて病院に通う．アメリカでも，当時のクルマはボロボロ，道はガタガタである．長距離のドライブはつらい．しょっちゅうパンクもする．ついに，彼女アーリーンは亡くなった．

「悲しそうな顔をして，アーリーンの死のことを，とやかく言われるのはまっぴらだ．だから，誰かがことのなりゆきをたずねたとき，『彼女は亡くなったよ．で，例のプログラムはあれからどうなっているかい？』と答えた．僕がアーリーンのことをくよくよ考えたくないのだ，ということはこれでみんなにすぐわかった」．

「一ヶ月経つまで，涙一つこぼさなかった．オークリッジの街を歩いていて，（オークリッジには別の原爆研究所があった）あるデパートの前にさしかかり，ショーウインドウにきれいなドレスがかかっているのを見たとき，僕は『ああ，アーリーンの好きそうな服だな』と思った．その瞬間だった．どっ

と悲しみが堰を切って溢れた」.

これを読んだとき，筆者はファインマンに対するそれまでの気持ちを，まったく切り捨てた．親しい人に死なれた悲しみは，ときと所を選ばずに，突然やってくる．そしていくばくかの涙が溢れる．一ヶ月はおろか，何年も，何十年経ってもあることだ.

第二の問題は，『故（カレ）その坂に登り立ち，アズマハヤと詔（ノ）らしき』と言うときの，『故（カレ)』の一字である．『故に』というのは，「論理のつながり・発展」を表わすのが普通である．幾何の証明などで，『ユエニ・ユエニ』と来られると，実にウンザリするときの，あれである．ところが，ここでは少しも「論理」がつながらない．『たちまち打ち殺した』—『カレ』—『その坂に登り立ち』というわけで，二つのステートメントが，「まったく唐突に」激突している．「カレ」を，「だから」と，いくら手元に引きつけてみても，まったくわからない．古事記は続けて，「故，その国を名付けてアズマという」とある．これは，「ソレデ，その国をアズマということになった」というだけで，何でもない.

「論理の不連続」を，「だから」でつなぐ用法はアリか？「オカシナやつ」・「没論理なやつ」で片付けるのはいつでもできる．しかし，ヤマトタケルには「精神鑑定」を要求してもいいかもしれないが，オオノ・ヤスマロはマトモだったのだろう？

「ラストダンスを私に」というシャンソンがあって，時々気晴らしにかける．他愛のないシャンソンで，政治・文学・理学・経済・国際情勢いっさい関係なし．もともと，1960年にヒットしたアメリカのポピュラー・ロック・コーラスである．フランス語訳になってかえって好くなったくらいだ．あるときぼんやりと聴いていると，いつものとおり，CDのカサビアンカが歌っていた：

“Dis lui bien que non !

Car,n’oublie pas que ce sera toi qui……”

(バッチリ，ダメと言ってやってよ！

ダッテ［car：キャール］忘れちゃダメよ，今夜はアンタが……)

思わずうなった.『そうか,「和化漢文」は，フランス語と同じ文法構造だったのか．しかも発音まで「故（カレ)」と「Car（キャール)」とは恐れ入った！「論理は後ろから来る」・「ダッテさア……」というわけか！』.

『足柄の坂本にいたり，みかりてを食すところに，その坂の神，白き鹿になりて来立ちぬ．しかして，すなわち，その食い残したまえる蒜（ヒル）の片端を持ちて待ち打ちたまえば，その目に当たりて，すなわち打ち殺したまいき．故（カレ)，その坂に登り立ち，三たび嘆かして,「アズマハヤ」と詔（ノ）らしき』

(打ち殺した．ダッテさア，坂を上り，立ち止まって,「アア・カノジョオ！」と三回も嘆いたほどの悲しみが，突然込み上げてきたんだモン！)

ヤマトタケルの食事中を，突然悲しみが襲うのは,「キッカケ」などなくても，本当はかまわない．しかし,「学者風に」リクツを並べればこうなる．それは,「鹿の目」のなかに,「カノジョの目」を見たのだ.「白い鹿」だったので，余計そう見えた，と言いたければ言っても良い.「鹿の目」は「人の目」に見えるかと気になる人は，奈良に行って鹿にセンベイでもやって，とくと見るが良い.『視線の定まらぬ鹿の目』を見れば，誰だってわかるであろう．スケープ・ゴートにされた彼女の目は，うつろだった．それでなくてさえ，すでに,「アラ，イテコイデスワ」と言った者があったことも，お忘れなく．

ヤマトタケルが「鹿の目」を打ったのは，本当はニンニクでも何でも良かったのである．なぜなら，タケルは食事中に突然,「彼女の目」を思い出し

たにすぎなかったからである．いや，『妄想』でも良い．彼にはその素質があることは，すでに見てきた．彼を，突然ファインマンと同じ悲しみが襲った．瞬間に立ち上がり，坂を登った．下っても良かったが，下には部下がいたのであろう．誰もいないところで，涙が溢れる．『アズマハヤ』と三度も嘆く．

繰り返すが，筆者は「鹿の話」はフィクションであろうと思う．『タケルは，突然悲しみの発作に襲われた』と言うだけで十分であったはずである．ただそれは，オオノ・ヤスマロの趣味ではなかっただけである．彼には，ストーリ・テラーとしてのリクツが必要であった．そして古代のリクツとは，『神秘主義』にほかならない．

タケルに，なぜ，不意に「カノジョの目」の悲しみが襲ったか？　それはわかり切ったこと！　24枚の畳に乗り移る，最後の瞬間まで，二人の目は見交わしていたからである．それがなぜ，いつまでも悲しいか？　そこが，『戦いが負け戦に終わったから』である．タケルは当時何歳だったか知らぬ．しかし軍人であったからには，人が死ぬのは覚悟のうえのはずである．軍人は，勝ち戦のときは，人が死んでも悲しみは見せない．ましてや，総司令官ならなおさらである．総司令官が悲しみに墜ちるのは，全面的敗北のときだけである．そのときになって初めて，『すべての死が無駄であった！』という救いのない悲しみに墜ちる．

山梨にきたときに，タケルは突然，妙な歌をうたう．『新治（ニイバリ），筑波を過ぎて，幾夜か寝つる』．すると供の者が，『かがなべて，夜には九（ココ）の夜．日には十日を』と答えたという．「植木算」である．新治というのは今も残る地名で，千葉県の北部には，「縄文時代の昔」から，稲作水田のあった跡が発見されている．「稲作水田農耕は弥生時代のもの」という定説は，崩れはじめている．したがって，「ヤマトタケルの東征」以前から，ここには「水田地帯」があったと言わねばなるまい．

筑波というのは，万葉集の「サキモリの歌」にもたくさん出てくる．問題

は「筑波山」というのは，「乱交パーティの開かれるディスコ・フロア」なのである．風紀に関係することなので，国語の授業では教えない．「学者ども」がこれに目を付けて，万葉集はポルノだなどと書いて，得意にならぬことを切望する．筑波のディスコ・パーティーは，いつ開かれたのかは知らない．どうせ農閑期，あるいは収穫期であろうが，ヤマトタケルはそのイベントのカレンダーを知っていたのであろう．「官官接待」にはコンパニオンを侍らせても良い，ということだったのであろうと想像される．なぜなら，十日もたったのに，『今日で何日目か』などと聞くのは，よほどの接待だったからだろう．筑波に「まつろわぬ者」などいるわけがない．どんな無駄金が，今なお巨大研究施設に投下されてきたか，見ればわかりそうなものだ．要するにタケルは，「走り水沖海戦」のあとでは，「まつろわぬ者」の所ではなく，「顔馴染みの人」の所を回っただけなのである．

『アメリカの鏡・日本』という本がある．戦後すぐ，アメリカの婦人従軍記者の書いた本で，マッカーサー指令部が，すぐさま「翻訳禁止処分」にした，いわく付きの本である．『日本の戦後がミジメなのは，アメリカ軍が破壊し尽くしたからだ』という趣旨で書かれている．最近になって，やっと翻訳出版されている．なかにこんな一節がある：

『以前には，傷痍（ショウイ）軍人は白衣をまとい，人々は，街頭で傷痍軍人に出会うとおじぎをした．今は，復員軍人は，ぜんぜんそんな丁重な待遇はされない．彼の家族は彼を喜んで迎え入れてくれるが，それだけでおしまいである．多くの都市や町において，冷淡にあしらわれる』．そうだった．東京でも，かなり長いこと，白衣を着た「傷痍軍人」が，山の手線のなかや公園などで，金属製の無骨な義足を鳴らして歩き回り，ときには立って古ぼけたアコーデオンを弾き，ときにはただ黙って，募金箱を突き出していた．やがて，「あれはニセモノらしいよ」という噂が広まり，誰も振り向きもしなくなった．今にして振り返れば，現在の日本人の心の荒廃は，われわれが『敗戦国民』としてスタートした，あのときから始まっていたことがよくわ

かる．

ヤマトタケル軍団壊滅敗走説に異論のある方たちに，最後のキーを差し上げよう．それは，タケルはどうしてヤマトに入らなかったのか，という話である．『ヤマトは国のマホロバ．ヤマトし麗わし』と，あのせせこましい場所を本気で宇宙のセンターと思い込んでいる人士にとって，タケルが『切々たる望郷の歌』を残し，ヤマトを目前にして「カムアガリ」したのが，残念でならぬらしい．見てのとおり簡単である．『敗軍の将』に帰る故郷などない．ヤマトの人たちも出迎えもしなかった．これが『敗戦』というものである．

§3　関東の蛮風

『学士会月報』という刊行物のなかで，こんな話を読んだと思った：

『あるとき，われわれ三人（の京大生）が吉田山の下を歩いていると，突然（誰とかが）こんなことを言った．〖日本もあの戦争から，すっかりだめになったなあ〗．われわれ二人は驚いた．後に有名になった，なんとか君のことだから，もちろん太平洋戦争のはずはないと，当時でも思った．日露戦争のことか，いやひょっとすると，日清戦争のことかもしれない．それで，おそるおそる聞いてみた．〖あの戦争ってどの戦争？〗．すると，〖もちろん，保元（ほうげん）平治だよ〗とこたえた』という（！）．

これを読んだとき，筆者はシテヤッタリ！　と思った．そうだ，『保元・平治の乱』こそは，長く続いて，どうしようもなく腐り切った『王朝・貴族文化』に剣の切っ先を突き付け，文字どおり，日本の中世の幕を切って落とした，『時代精神』の現れである．それを，これまでは一言で，『下剋上（下の者が上のものをヤッツケル）の時代』などと表現してきた．

物語作家は『公家でもなければ，武家でもない』．それで，ものごとの真相が理解できていない．いわば今日の，『学者・大学教授のやること』に近

い．もし，『体制派 vs 反体制派の戦い』ということダケに，『保元・平治の乱』をタイプ化すれば，これほど悲惨な，反体制派の『壊滅・敗走の物語』もほかにあるまい．体制の走狗となった平家は，明確に時代精神をつかんでいた．争う源氏は，アセリと憤懣に空転し，準備不足のまま突進し，戦に破れ，皆殺しの憂き目にあった．司令部を失った源氏の『残党』は，血をしたたらせながら，アズマへと敗走して来た．藤原氏・平氏・源氏による三巴の王朝・貴族・政治社会の緊張は，不安定要素の一つである源氏の敗北によって，ここに決着をみたかのように見えた．事実，1156年の保元の乱，1159年の平治の乱から，1180年の頼朝の旗揚げまで，約20年間の長きにわたり，『平家の時代』が続いた．『「時代精神」が，馬に乗って窓の下を通る』と，ナポレオンのことを表現したのはヘーゲルである，という．それにも似た，英雄的旗頭の清盛は42歳の働き盛り．他方のやっと命拾いをした頼朝は，13歳の，ひ弱なガキにすぎなかった．これがやがて，6年間にも及ぶ『源平合戦』の火種になろうなどとは，当時，誰も思わなかったにちがいない．

しかし，事態の背景は，『史書』の語るほど簡単ではなかった．政治・権力をめぐるゴタゴタ話が終わると，サカシラぶって次に語られるのは，『経済上の発展』である．新しく開発された荘園が増えると，その『利権をめぐる争い』が起こる．新開発の荘園が増えること，そのこと自体が，あれほど堅固に見えた，古典的『律令制』の根幹をゆるがしていった．地方では，中央派遣の末端組織員が襲撃・殺害され，都には『悪党』がはびこり，貴族的支配体制が崩壊していったと書く．しかし，その原動力（motive force）は何か？　その説明は聞いたことがない．

人間の生活には，ハード・ウエアとソフト・ウエアがある．ソフト・ウエアの話は見てのとおりザラにある．では，ハード・ウエアの話とは何か？それは文字どおり，ハード・ウエア（金物）つまり『鉄』である．鉄剣あるいは鉄の薙刀を振るうものが，勝手な『権力奪取』に取り掛かる．それが，わが国中世の，ハード・ウエアの『時代精神』である．

失脚したフルシチョフがこんなことを言ったという．『なんにでも飽きはくる．食・女・コニャックさえも――ただ権力だけは，手に入れば入るほど，ますます多くほしくなるものだ』と．本当であろう．そう思ってみれば，理解できることが非常に多い．

鉄剣の作り方には二とおりある．一つは，誰でも知っているように，鉄を熔かしてから，鋳物あるいは鋼にする近代的な製鉄法である．しかしこれには，高温にするもの，つまり溶鉱炉とコークスが必要である．不幸にして日本には，石炭の露出層がなかった．つまり露天掘りができない．したがって古代から，コークスを使った製鉄法はない．近年，九州を中心として，剣・矛の鋳型の出土が相次いで報告されているが，これらはすべて銅あるいは青銅のためのものである．それなのに，一方では正倉院の御物などには，小刀などのハガネ製品がかなり見られる．もちろん輸入品もあろう．しかし，見逃してならないことは，ここに木炭を用いた製鉄法の秘密が隠されていることである．

鉄文明の発祥地は，古代（BC5000）の，中央アジア・ヒッタイトであろうということになっている．だいたい，青銅時代・鉄時代という，これまでの中国渡来の時代区分の考え方が錯覚であろう，ということになってきた．銅・青銅は高貴なもの，鉄は卑しいものという考えが普通ではなかったか，というのである．それはおそらく，鋳型から取り出したばかりのときの光沢によるのであろう．事実，新品の10円玉などは素晴らしく美しいではないか．銅鐸の輝きなども，目が覚めるほどであっただろうと想像される．露天掘りの石炭を持たぬ日本人にはわからぬことであるが，鋳型から出たばかりの鉄は美しいか？　クロガネというくらいである．研いでない鉄は美しくない．したがって，銅・青銅は貴族の持つもの，鉄は庶民のものとして，同時進行していたのだろう，というのである．

木炭を使って，鉄を熔融せずにハガネにしてみせる方法は，『秘法』であったろうと思われる．『秘法』というのは，権力者の追及を逃れるための口

実であることが多い．そのために，後でも述べるが，川をさかのぼった山の中に隠れる．水が必要になるからである．かのヤマタノオロチ神話などは，刀剣密造にかかわる，『銃刀法違反摘発部隊』の，活動記録第一号とも解釈できるではないか．

ここで『秘法』といった理由の第一は，刀鍛冶は火起こしのために，火打ち石などを使わぬことである．まず，トンテン・トンテンと『鉄を叩いて』，その摩擦熱（正確には断熱圧縮熱・あるいは内部摩擦熱というべきであろうが）によって鉄塊を熱くし，やがてポッと，乾燥した藁を自然発火させる．これは『銃刀法違反摘発部隊』に不意に乗り込まれたときに，「火打ち石など持ってません！」と，言い逃れるためではなかったのか？　その証拠には，この秘法は，特に厳重に隠されていた．もちろん，何日も前から酒色を絶って，精進潔斎をする．これは，かのヤマタノオロチのワイルド・パーティーで一杯くわされ，酷い目にあわされた御先祖様からの，『申し送り事項』のためであろう．

『秘法』といった第二の理由は，当局の摘発部隊の追及がきびしいからである．皮肉なことに，輸入品の直刀よりも，国産の短刀（あるいは直刀）の方が『強かった』．現在のわれわれは，これが「ハガネと粗鋼」によるちがいであることを知っている．しかし，当時の古代人にとっては，不思議なことであったにちがいない．なぜ，石炭あるいはコークスを用いて，高温で造ったはずのものが，木炭しか使えずに，「鉄を軟化しただけ」で造ったものよりも『弱い』のか．これを古代人は，と言っても4世紀のことにすぎないが，『心を込めて鍛えた』と，刀身に刻み込んだ．

「鋳物の剣には重大な欠陥がある」ということは，AD 350年頃のヤマトは知らなかったであろう．クサナギノツルギは，向かうところ敵なしである．短い『腰刀』など，長い剣の敵ではない．しかしこの欠陥は，早ければ AD 390 年頃の好太王との戦い，あるいは，AD 663年頃の白村江の戦い，遅くとも，AD 672年の任申の乱において，ハッキリと認識されたにちがいない．

なぜなら，ここに挙げた各例の共通因子は，『重大な敗北』ということだからである．その理由は，『剣がアッケなく折れた』ということであろう．乱戦になれば，青銅の剣にさえ負けたであろう．

万葉集のサキモリの歌を見ると，いつも不思議に思った．なぜ彼らはこんなに簡単に命令に従うのか．イヤイヤであることは，歌を見ればわかる．カネか，宗教か，部族意識か．今でもわからない．しかし，少なくとも一つは，剣による恐怖であろう．そしてその剣は，実はモロイ物であることを，支配者側は知ってしまった．こんな情報を公開することなぞできない．輸入品の剣に頼り，そのルートを独占していた彼らは，この，血の凍るような危険を悟った．まだキリスト教の伝道師が来た記録はないが，彼らは，『剣によりて立つものは，剣によりて滅ぶべし』と，自分で直感したのである．それでなければ，刀鍛冶が追及されて，山奥に逃げ込むわけがない（ではないか）！　ハガネの剣を密造・密輸することなぞ，国家存立の基盤を危うくする，重大な国家犯罪であったのである．

いずれにせよ，かの稲荷山鉄剣古墳の金文字は，ワニによる「文字伝来」などよりはるかに古く，鉄剣はもちろんハガネである．また，奈良にある，訳のわからぬ枝が6本付いている「七支刀」は，エックス線検査の結果では，打ち出しであることがわかっているという．いずれも，朝鮮経由で輸入されたもので，4世紀の作である．

今，「訳のわからぬ6枝」と言ったが，これは正確な言い方ではない．使う身になれば，これほどハッキリしているものはない．これを『実用にならぬので，祭儀品であろう』などというのは，『権力』というものを真剣に考えたことのない学者の言い分である．

『権力の覇者』つまり『王』になれば，いつ殺し屋に襲われるかわからない．刺客が剣を振り上げて斬りかかってきたときに，王は，ただタテに剣をかまえて，これを受ければいいのである．剣道の達人のように，慌てて相手の剣を払う必要はない．素人にでもできる．6本の枝のどれかが，殺し屋の剣を受け止めてしまえば，後は取り巻きが処分してくれる．青銅の矛も同じ

である．ただの『祭儀品』として，何十・何百と同じ物を造るわけがない．いつだって，立派に殺人の武器，すなわち実力支配の道具になるのである．

青銅製の刀で斬り合う，『チャカポコ・チャカポコ』という西洋映画の乱闘シーンは，『チャリーン・チャリーン』と澄んだ音のする，おなじみのチャンバラ・シーンにくらべると，なんとも冴えない．しかしあれが，わが国でも，古代王朝時代を支配した，恐怖の音であったにちがいない．

木炭を使ってハガネを造る秘法が，いつのまにか山を下って，『村の鍛冶屋』となったとき，わが国のハード・ウエア社会に劇的な変化が起こった．それが貴族社会を根幹から覆したのである．

一つは，これまでは述べてこなかったが，農機具に対する鉄の応用である．鍬の先に鉄が嵌められたとき，農作物の収穫量が飛躍的に増えた．これは，地面がこれまでよりも深く耕されるようになった結果，植物の根が深く張り，よりよく育つようになったためである．『新荘園開発促進』という『国策』にもかなっていた．もはや鍛冶屋は，当局の追及を恐れる理由はなかった．わが国の農業技術と政治史の関係を論じた話をあまり知らないが，西洋史では，中世になって馬に引かせる鋤が，深耕技術を発展させ，『穏やかで，信心深い中世の日常生活』を支えていったことはよく知られている．ついでながら，『暗黒の中世』という認識は，もはや過去のものである．

村に鍛冶屋ができれば，彼らは，刀・矢じり・馬具・などの武具も造り，修繕・改造もする．これだけの社会的ニーズを前にして，『軍事研究には一切協力しない』などと，浮き世離れしたことを言いながら，生活が成り立つと思っている者などいなかった．彼らは労働者であって，『研究貴族』ではなかった．いったい，京を荒らしまくる僧兵の持つ薙刀は，どこの誰が造ったとでも思っているのだろう．すでに京の粟田口には，鍛冶屋・研ぎ屋が軒を並べていた．丸腰では危なくて，京に入れないからである．一番良くこれを表現する今日的言葉を探せば，『ワイルド・ワイルド・ウエスト』という他はあるまい．

京がそうであれば，アズマは推して知るべしである．京は狭いがアズマは広い．テクテクと歩いていたのでは，一日中かかっても用が足せない．当然求められるのが『馬』の『機動力』である．いったい，どんな連中が馬に乗って，何をするのか？

アズマは広いので，話をしばらく『武蔵の国』に限ることにする．ここで，当時暴れ回っていたものを『党』という．人をののしるときに，『悪党！』などという『党』であって，今日の，パーティーというものではない．すでに『武蔵七党』といって，大きな党が七つあった．学者・大学教授・研究貴族などはソソッカシイから，これを聞くと，武蔵には『七つしかなかった』と思い込む．それで『高井戸（党）』などというと，そんなものナイ！　と，たいそうな返事をする．どんな党があったか，そんなことは『当局も把握していない』のである．

彼らの実態は，今日流にいえば，ギャング・マフィア・シンジケートなどは良いほうで，ゴロツキ・暴力団・暴走族・野伏せりなどなど，要するに『馬賊』である．ドイツ文学流に，ロイバー（群盗）と，ゲーテ・シラーの香りをつけて表現しても良い．

それが，今日のバイクに乗った暴走族のごとく，ひずめの音高く現れては，『そんなもの，中央政府に収める必要などない．こっちへ寄こせ．俺たちが話をつけてやる！』といって，国府・郡司を襲い，必要とあれば合戦を挑む．用が済めば，あるいは蹴散らされれば，また煙のようにいなくなる．まさに『中共・八路軍の遊撃戦』そのもので，奈良・京都の中央派遣軍には，最後の勝利などない．かつては，納税物資集積所を兼ねたであろうと思われる，武蔵国府跡などは，今もって良くわからぬほどに，徹底的に破壊されている．それは，それだけ，地域住民の支持がなかったともいえるが．

なぜ，このようなことがまかりとおるかといえば，中央官庁が無能だからである．彼らは，当事者能力がすでに失われていることを認めようともせず，なんでもかんでも京の指示を仰げと言ってくる．新開荘園をめぐる利権の配分，紛争の裁決，すべてが上申を要求するだけで，結論が降りてこない．た

まにくれば，中央の利権にからんだ『受領』話ばかりで，実情にあわない勝手な裁決ばかりである．それも恐ろしく時間のかかった後で！

彼らは，『伊勢平家』の地盤までは，実態を把握していたのであろう．しかし，富士川以東，ことに武蔵・アズマなど，年に一度の『受領話』のほかには，興味も関心も知識もなかった．要するに，母系に食い込んできた藤原氏，身辺警護の雇われ殿上人として食い込んだ，『軍事貴族』の平家，それに公家たちは，『いかに外には広い世界があるか．それは，いかに実り多い世界であるか』ということには，オドロキ・アキレルばかりに，『一切，無知・無関心』であった！

このような，『乾いた薪を積み上げたような所』へ，他方の『軍事貴族』である源氏の一味が，敗者として追放されて来たのである．『馬賊』たちにとって，これほど絶好のオミコシはなかった．貴族社会にとって，これほど絶望的失政はなかった．（と後からなら言いやすい）

『馬賊』たちの乗り回している馬は国産か？　もちろんである．当時は，サラブレッド（外車）に乗りたいなどと言うドラ息子は，アズマにはまだいなかった．この点を捕らえて，やれ源氏の馬は，乗れば足が地べたにつく程度だったの，馬というよりはロバに近いだのと，知ったふうなことをいう学者・文人が後を断たない．そのくせ，奈良時代の『駅鈴』の馬はタイシタモンだったと思っている．アズマでは，馬がたとえたった0.3馬力であろうとも，馬がなければ，武蔵野で道に迷えば，ミイラになることもありうるということを知らない．

しかも，こういう人たちの武蔵野とは，かの『国木田独歩の武蔵野』である．雑木林の武蔵野である．だいたい，『雑木』という木はない．国木田独歩の雑木林とは，クヌギ林のことである．そしてそのクヌギ林は，『炭を焼くための林』であって，勝手に自生したものではない．クヌギ林など，どんなに混んでいてもコワクはない．必ず見とおせる．しかし，本当の原生林は怖いほど暗い．中学時代の軍事訓練で武蔵野に出て，ふと気がつくと一人になっていたことがある．現在の武蔵小金井の，多摩川上水の近くだった．信

じられまいが，密林のなかで十字路に出た．のぞき込むとどちらも暗い．さて困った．どちらも幅2mほどだから，どこかには出るにちがいない．しかしどのくらい先か，それが困る．途方にくれていると，ヒョッコリと，吉野君という地元出の友人が現れた．彼は，『こっちだよ』と言うと，いとも簡単に進んだ．

これでも十分ではない．実は，原生林の樹相など，しょっちゅう変わるのである．20年もすれば，密林は空き地に変わり，原野は密林となる．したがって，奈良・平安・鎌倉と，武蔵野がどんなだったかなど，誰にもわかりはしないのである．唯一はっきりしていることがある．それは，落葉樹林であったろうことである．これに対して，古代の関西は常緑樹林であったと推定されている．したがって，稲作には日向が欲しい．それで，『日の照るところは，み～んなオレのものだ』というセリフが意味を持つ．アズマでは冬になれば，いつだって日が照るので，意味のないセリフとなる．

その馬はどこで飼育されていたか．それが，現在の『日野・豊田』付近の武蔵野である．伝統というのは争えない．後年，日野には『ヒノ・ルノー』が工場を造った．トヨタは言うまでもあるまい．座間には『ニッサン』の工場があった．広いところに立てば，誰でも『乗り物』のことを考えるのだろう．それなのに，『武蔵の国の住民は，多摩の谷間に追いやられ，貧困の奴隷農業を強いられていた』なんて，ヨウ言うヨ！

§4　平山一族

武蔵七党，つまり武蔵の国の『馬賊の七悪党ども』とは，村山・横山・猪股・与野・児玉・西・騎西をさすと言われている．しかし，すでに述べたとおり，『馬賊』はこれだけに限らない．これから述べる平山一族は，たいていのリストには出てこない．文献リストに出ていないものは，存在しなかったと思うのは，『観測できないものは，存在しない』という，有名な『物理学の認識上の錯覚』と同じ次元の議論になる．

武蔵七党に限らず，アズマの党だからといって，みな源氏方であるなどとは限らない．時代・地域・人物によって，それぞれの利害が複雑にいりまじる．まさにバルカニゼーション（バルカン半島化）というものである．それらを，とにもかくにも引き連れていくところに，一人頼朝の力量だけではなく，『時代精神』というものを感じざるを得ない．ただ一つ，『大勢集まれば党か？』というと，そうではなかった．党を成す条件は，『何らかの理由で，先代よりの受領を持っていること』であった．これはもちろん，『封建領主から頂いたもの』ではない．ときはまだ，封建時代ではない．かと言って，『ただ百姓を脅して巻き上げたもの』であってはならないのである．ここに，『軍事貴族』と農民の中間にある，『中世武士階級』の特殊性がある．つまり彼らは，『米』という動産だけではなく，『領地』ともいうべき不動産を持っていなければならなかった．もちろん彼らは自作農ではない．地主でもなく，不在地主でもない．鍬・升・ソロバン・ゼニでなく，『剣』で自立生活する階級である．ここにわが国の『中世』がある．近代的感覚で言えば，『古代王朝の末端組織から，勝手に権力奪取した，中間管理階級』と言えよう．物語作家・公家には理解できなかった『新しい存在』である．

京で軍事的衝突が起こったときには，時代の変革はすでに中盤を過ぎていた．1159年（平治元年）12月10日，清盛の留守を狙って，保守派の後白河上皇派は，あせった宮廷クーデターに出る．しかし，明確な政治・権力・奪取の目標が立てていない．そのまま，保守派特有の，複雑な利害調整に時間を空費する．清盛は，急ぎ19日に京に戻る．清盛はすぐさま，二条天皇の親政を要求している新勢力派の結集に成功する．それで，保守派の宮廷クーデターの成果は，無に帰してしまう．あわてた源氏方は，やっと26日になって，平家の本拠，六波羅の邸を襲う．しかし，ときすでに遅く，軍事的な少数派に転落し，合戦は一日で敗北に終わる．敗走の途中で，ほとんどの源氏方『軍事貴族』は処刑され，ご存じ，頼朝・牛若は生きのびた．

源氏の主力が，保守派の後白河上皇方に組したわけは，一つには，清盛の

時代を読み切る政治的能力が，源氏方より優れていたこと．二つには，主として，『地方』に勢力を持つ『田舎源氏』の，時代認識の遅れ（遅延効果）ということができよう．個人的な恨みつらみ・好き嫌いの次元で事件を語るのは，物語作者自身の『人格・品性・能力・時代感覚』を反映してのことに過ぎない．本気で付きあう気にはなれない．

『平治物語』（六波羅合戦のこと）の段に，『二十余騎，六波羅へおしよせ，一二の垣盾（かいだて）うちやぶりて，おめいて駆け入り，さんざんに戦いけり』とある．そのなかに，『平山の武者所』の名前がある．『武者所（むしゃどころ)』というのは，『上皇の北面を守る武士・あるいはその場所』のことである．これによって，上皇方と源氏の『平山党』との関係が，かなり強いものであったことがわかる．また，『二十余騎』というのは，騎馬武者のことであって，おのおのが徒歩立ち（かちだち）を従えるので，総人数では，百ないし二百ということになる．これは賀茂川をはさんだ東岸で，五条・六条・七条と，3ブロックそこそこでの合戦であり，大会戦を想像したら当てが外れる．

平山党というのは，現在の『京王線・平山城址』付近を地盤とする，『武蔵の国の住人』である．『平山という所』にいたので平山党というのか，平山党がいたので地名が平山なのか，原因と結果がはっきりしない．もっとも，こんなことは『ザラにあること』で，「三浦」半島・「千葉」県など，いくらでもある．東京では人の名前を言わずに，地名で話をする習慣が，親しい間には残っていた．たとえば，「ちょっと千駄ヶ谷に寄ってくる」と言えば，サッカーを見てから帰るというのではなく，「オヤジ・オフクロの所に寄ってくる」という意味である，など．いずれにせよ，彼『平山の武者所』は，『軍事貴族』つまり「殿上人（五位以上)」ではないが，平山党のなかでは『主君』と呼ばれていた重要人物である．その名は『季重（すえしげ)』という．

物語では，清盛が六波羅邸寝殿の北側にいて，戦いの指揮をしていると，

その部屋の板の扉に，『かたきの射る矢が雨の降るごとく当たりければ，清盛大いに怒（いか）って，「恥じある侍がなければこそ，これまでかたきを近づくれ」とて……』とある（どうか，物語であることをお忘れなく）．しかし，これはよく分かることで，得意の『遠矢』を射かけて来たのである．アズマは広いので馬に乗る．馬に乗れば，斬り合う前にまず矢を射かける．それで長距離の『遠矢』の技術が発達した．と言っても，アーチェリーのような，スタビライザーの発明はなかった．そんな弓で，100ヤード離れて，どれほどの命中率があったかはわからない．馬上の弓は短いが，二枚張りの強弓である．それを使って，『十二束（そく）三つ伏せ』という，信じられない長さの矢を射かけてくる．（一束は片手の一握りで，指4本分，約9 cm幅．三つ伏せは指3本分の幅．したがって全長約115 cmになる）．清盛は，それまで『遠矢』を浴びたことがなかったのだろう．あり得ることだ．遠矢は，相手をタジロガセルためである．ところが清盛は，逆に『いかった』．これは，サスガと言うべきであろう．

秦の遺跡の展示会で，部屋のすみに何気なく転がっていた，二つの錆びた鉄器を見た．説明も何もない．一つは，弩（いしゆみ）の引き金（トリガーのレバー）であることはすぐわかった．『ああ，これが，遂にわが国にはなかったんだよなあ』と思った．40 cmほどの鉄板の弓を造り，50 cm足らずの矢とセットにする．すごく強力な武器である．それを台座にしかけて，引き金で止めて，ジッとチャンスを狙う．少しも疲れない．狙いは正確，飛距離も長い．秦の天下統一のハード・ウエアである．BC 221年のことである．

中世になってモンゴルがヨーロッパに攻め込んだとき，トリガーの秘密が伝わる．イギリス・ヘースチングスの会戦で，ついに『無敵の騎兵軍団』は，『弩を持った歩兵集団』の前に全滅する．『白い無数の矢羽根が，雪の舞うように飛んで行き，騎兵隊がバラバラと落馬した』という．『弓は馬に勝てない』という時代は終わった．弩は「鉄砲の機能」を全部持っていた．ただ砲身以外は．火薬もモンゴルから来た．火縄銃・火打ち石銃は，弩と火薬のド

ッキングで造られた．やがて大砲が造られ，城門がぶち破られたとき，ヨーロッパの中世は音を立てて崩れ去った．わが国では，武田の騎馬軍団が火縄銃の前に敗北するまで，『馬』が幅をきかせる時代が続いていた．

いま一つの鉄器はヤジリであった．見ているうちに背筋が寒くなった．これこそ，秦の国家統一の『秘密兵器』であったのだろう．そのヤジリは，鉛筆のようであった．先端はアリキタリであるが，なぜか「竹に差し込む部分」が20cm近くもある．やがて，ハッと悟った．この矢は重い．つまり『運動量（重さ・カケル・速さ)』が普通の矢の5倍にもなり得るのである．それは『貫通力』となる．

『秦の矢はヨロイを刺し貫く』と言われていた．その秘密が，今ここにある．外から見たのでは，竹の中に隠されている鉄の芯は見えない．『弩』は見えるので用心する．しかし，矢は？　それは，当たった者だけが知ることになる．しかし，そのときではもう遅いのである．理由もわからぬまま，先兵がバタバタと『矢合わせ』に倒れ，絶命するとき，隊陣は浮き足立つ．そこに，すかさず，荒馬に引かせた『戦車』が突っ込んでくる．しかも，戦車の車輪には，車軸を外して『薙刀の刃』が取り付けてある．それで，戦車が走ると，車輪と共に薙刀の刃が，クルクルとサイクロイド曲線を描いて，回転しなが突っ込んでくる．それは，横合いから戦車に取り付こうとする敵兵の，向こう脛を狙って斬り払ってくる．しかも戦車の数は多い．『君主御自身』が出陣するときは，一万台の戦車が動員される．戦車は『乗（じょう)』という単位で数えるので，君主のことを『万乗（ばんじょう）の君』という．こんな戦いが始まれば，たちまち死傷者ゴロゴロの大変な修羅場になる．そこへゆくと，賀茂川をはさんだ『源平合戦』など，なんと芸術的であることか！

平山の武者所・季重ら源氏の一隊は，平家の一隊が賀茂川東岸を北上しだすと，包囲されまいと，賀茂川西岸の京極通りを，北へ北へと逃げ出す．後には，勝ちに奢った平家の雑兵が追いすがり，矢を射かけ，街には放火・略

奪が始まる．一隊は，さらに洛北から大原を回り，不破の関を回って，ついに美濃に入る．もちろん，同業・シンパ・顔馴染みがなければ，こんな逃避行がうまくいくわけがない．それはどんな人たちか？　それは物語作家の知らぬことであったから，書けないし，書いていない．幸いに，われわれは後に見るであろう．

頃は12月，雪の深い比叡山のなかを，牛若親子がさまよう話が出てくる．雪の信濃路も楽な所ではなかったろう．それかあらぬか，東海道を下ったという話もある．いずれにせよ，オハナシであることを，お忘れなく．

『保元・平治物語』はかなり長期にわたって，いろいろな人により，いろいろに書かれている．『初期の古い作品ほど，清盛の体制支持を賛美し，後期の作品ほど平家に批判的で，源氏に同情的である』などと言う．アッタリマエでしょう！　こんなことが『研究』で，それで『学者商売』が成り立つなんて．物語作家たちは，ただ，『ときの権力におもね，大衆に迎合しているだけ』ナンデスヨ．『清盛が，あわてて兜を後ろ前にかぶった』という一節が，あるとか・ないとか．そんなことが『古典購読・古典解釈』ですか？　アホクサ！

1180年（治承4年）秋10月，ついに源平の両軍は富士川両岸に着いた．それまでに頼朝は伊豆で暮らし，三浦半島で暮らし，房総に千葉氏を頼り，まるで源氏の御曹司というよりは，もう骨の髄まで，有力者・北条の子になっていた．平家到着，10月16日，合戦予定日は23日である．この間ジャスト一週間，頼朝はいったい何をしていたのでしょう？　『平家物語』には何も書いてない．平家の軍勢七万，源氏二十万などと，およそデタラメとしか言い様のない数字が並んでいる．

頼朝は，平家の軍勢が揃うのを待っていたのか？　義経が来るのを待っていたのか？　どうしてどうして，ここは決まっている．富士川の水が引いて，徒歩（かち）武者が歩いて渡るための浅瀬が現れるのを待っていたのですよ．騎馬軍団だけが進んだのでは戦にならない．軍人・大将は，戦場の条件を選

ぶ以外に，何を待ちますか！　味方が敵よりも有利に戦うこと以外に，彼の関心は何もない．しかも，一日待てば，それだけ皆を食べさせねばならない．大変な負担になるのです．二十万人ならば，米だけで，一日で約2500俵必要になる．いくら収穫期の後だといっても，そんなゆとりがあったかどうか．かのアイゼンハウワーも，英仏海峡では，天候の回復を待たされた．もっとも彼の場合は，作戦の都合上，「フランス沿岸では，夜は満月晴天・朝は引き潮でなければならない」という，大変込み入った条件ではあったけれども．

筆者は，この『富士川の合戦話』は，平家物語の作者による『作り話（デッチアゲ・Frame-Up)』であると考えている．その理由は二つある:

【1】まず合戦そのものが，たった一つの小競り合いさえも報告がない．ご承知のように，『平家の大軍は，ただでさえ関東武者の蛮勇の噂におびえていた．合戦の前の晩には，富士川東岸の住民が明日の戦乱の難を避けて，山野あるいは海上に逃げ出して，かがり火を焚いているのを，源氏の大軍の野営と思い込んだ．夜明けになると，鳥の大群が飛び立つ羽音に驚き，いっせいに逃げ出した』という．ソンナバカナ！

まず第一に，七万からの大軍が，三時間や四時間で，急に煙のように一兵もいなくなるなどと，そんな迅速な移動ができるわけがない．『話半分』として，一万人だったとしても，『押すな押すなの大騒ぎ』になり，『将棋倒しになり，圧死する者続出』となるに決まっている．だって平家の大軍は，われ先に逃げようとしたというのでしょう？

第二に，二十万からの大軍を動員した頼朝が，追撃もしないで兵を引くワケがない．ここも『話半分』として，一万人としても，彼は部下に論功行賞を出してやらねばならないのです．勝ち戦なら，なおさらだ．『来たり・見たり・勝てり』といったシーザーだって，『戦った』のです．勝ち戦をミスミス指をくわえて見逃がして，引き下がったのでは部下が承知しない．そんなことでは大将・政治家はつとまりません．かつて『湾岸戦争（Gulf-crisis)』

のときに，あれだけの大軍を動かしているブッシュ大統領が，「ぎりぎりで手を引くだろう」などという議論がはびこり，日本人の『平和ボケ』にアゼンとした記憶が新しい．アメリカなら議会が承知しない．頼朝なら，『戦えない大将』とレッテルを張られて，皆逃げ出してしまう．『実力の時代』というのが『時代精神』であることを，くれぐれもお忘れなく．論功行賞の証拠品にするから，生首を取ってこいという時代なのです．絵空事もいいところだ．ここは，よく言って，『何かの理由で，平家は途中で引き返した』からにちがいない．その理由は言えないが，つじつまは合わせなければならない．しかも，物語は平家の滅亡以後の作である．どんなに平家を笑い者にしても，最早はばかるところはない．したがって，これも物語作者の『権力追従・大衆迎合』としか考えられない．

【2】『富士川の合戦』のあったという『1180年（治承4年）』という年は，実は大変な年なのです．京の生活も治安も，すでに極端に悪い．この辺の話は『方丈記』に詳しい．それによると，まず，1177年（安元3年・治承元年）春4月，京に大火があり，街の1/3，公家の家16，『内裏焼失』の憂き目にあっている．街の1/3というのは，当時の京は，中央を南北に走る『朱雀通』付近の『大宮通』より東半分，いわゆる『左京』しか実質上なかったので，街はほぼ全滅ということになる．続く，当の1180年（治承4年）4月，『辻風』が吹きまくり，また街の家が多数壊れる．これは恐らく，『春の嵐』であろう．しかも，その年まさに6月．かの悪名高い『福原遷都』が始まっている．

福原遷都は大変な失政・ミスジャジメントである．『家はこぼたれて，淀川に浮かび，地は目の前に畑となる』．家を分解して，船に積んで淀川を下る（建築資材が足りませんからね）．すると，空き地はみるみる畑にされる．（前後して飢饉がある）．しかも，福原（現在の神戸付近）に行ってみると，建築が間に合わず，資材は野積みになって腐っている．土地は狭く，なんと山地までが都市計画区域だという．とうとう，ダメだというので，計画を中止して，また都を京に戻す．またまた大混乱になる．要するに政権には，もう軍

を出せるような資力・政治力などないとしか考えられない．

平家物語にも，当然『内裏炎上・都うつり』の記述がある．そこに，素知らぬ顔で，富士川合戦が挟まれている．これは多分，よくて途中まで，悪ければ『空出張』だったろう．デッチアゲといった理由である．もちろん，敗走した軍隊の記述などない．〖だから，『聞き書き・インタビューなどは三流の資料だ』と言われることになるのだ．〗

では頼朝は出兵したか？　それは，挙兵はしただろう．だがこんな会戦はなかった．では，このデッチアゲは何のためか？　それは，『頼朝は，平家の支配を最初に打倒した功労者・義仲より先駆けていた』ことにしたい，物語作家の鎌倉政権への追従であろう．

関東の読者にとって，関西の川は馴染みがなかろう．それで説明をしておこう．簡単である．まず琵琶湖から流れ出る川を『瀬田川』という．『瀬田のから橋』で有名な瀬田から出るからである．ところがこれを，時々『宇治川』ともいう．なぜならば，瀬田川が下って，京の南の『宇治』付近を流れる頃には，これを『宇治川』と言うからである．宇治川はさらに下ると，京の東を流れてきた『賀茂川』と合流し，以後は『淀川』と言われて，大阪を通る．それだけである．賀茂川には，琵琶湖から直接水を落とす，人工の『インクライン』がある．京都の東の山際から流れ出し，その岸の散策道を，えらい自慢の名所にしている．賀茂川をさかのぼると，郊外で二手に別れる．西の川は鞍馬山・貴船山（きふね）を源流とし，これを賀茂川という．東の川は高野山を望むので高野川という．京には，この他に，西に『桂川』がある．嵐山の紅葉で売り出している．これも本当は，『大堰川』という．水をせき止め，船遊びのまねごとをして，観光客をダマスからである．本当の桂川はもっと下った，京の南を流れる部分を指すが，観光客など，どうせそんなことは知らない．

したがって『宇治川』には，『瀬田の橋』と『宇治の橋』の二本が架かっていた．これらの橋の板を取り払って，いまや源氏の主力に攻められる立場に転落した義仲は，防戦に出た．したがって，『宇治川の先陣争い』も二つ

あったのである．

そもそも，先陣争いなどなぜするのかと言えば，もちろん論功行賞のためである．これは「個人プレー」ではない．『党・家名』の命運をかけた，重要な功名争いなのである．党の浮沈は，個人の命運にもかかわる．したがって，重要なイベントなのである．しかもそれは，大変に危険でもある．気楽なゲームではない．川を渡り，対岸にたどり着くと，「ハ～イ・平山チャ～ン・一着～！」などと言って，ソレデオシマイになるものではない．敵陣にたどり着けば敵がいる．戦いとなる．そこで敵に動揺を与え，敵軍敗走のきっかけを作らねばならない．もし失敗すれば，当然『先陣の功名』どころではない．

前に『弓は馬に勝てない』と言ったが，馬にも弱点がある．馬は疲れやすい．長時間の激戦には耐えられない．それで，敵陣に突っ込んでも，頃合を見て，すぐさま引き返して，自分の陣地に戻り，馬を休ませなければならない．この『突撃と退却』の組み合わせが，騎馬軍団を動かすには重要である．もちろん，乱戦になって動きがとれなくなり，『渋滞に巻き込まれれば』，騎兵は歩兵より不利にさえなる．有名な例は，『アメリカ・第七騎兵師団が，アメリカ・インディアンに囲まれて全滅した』例であろう．生存者が一人もいないので，正確には何があったのか不明である．したがって今でも，その恨みを記念して，米軍には『第七騎兵師団』というものはない．ご存じ，戦後，日本に駐留してきたのは第八騎兵師団であった．わけても，『東京進駐の栄誉』を受けて，東京に駐留してきたのは，『太平洋の島々を，フィリッピンまで』戦ってきた，マッカーサー子飼いの『第一騎兵師団 (First Cavalry)』の面々であった．『どんな乱暴者が乗り込んで来るやら！』と，覚悟していたワレワレの前に，身なりの良い軍服を着て，選りすぐった，態度のよいハンサムな若者たちが現れたとき，ワレワレは皆『敗ケタア！』と痛感した．

平家物語によれば，源氏の義仲攻撃は二手になっている．正面攻撃の主力は，蒲郡で育った範頼があたる．彼は頼朝の異母弟である．ルートは，瀬田から逢坂山を越えて，賀茂川東岸から正面攻撃にかかる．背面攻撃は，ご存

じ異母弟の義経があたる．ルートは宇治で宇治川を越え，京都東南の伏見をへて攻め入る作戦である．有名な宇治川の先陣争いの物語は，義経ルートの宇治橋でのエピソードである．義経のルートに参加したものたちは，安田・大内・田代・畠山・長野・梶原・佐々木・糟谷・渋谷に続いて，『平山の武者所・季重（すえしげ)』の名がある．総勢二万五千余騎とあるが，数は当てにならない．メインの瀬田ルートについては，『はかりごとをして，田上の瀬を渡った』としか記述がない．もちろん，義経ルートは各地で転戦のうえで，宇治にたどり着いた．しかし物語作家はそんなこととは知らないので，記述はない．

敗れた義仲は，三条・粟田口から，琵琶湖のほとりの大津に出る．ここは，万葉の昔から船着き場として有名な所である．彼はさらに東に下って，粟津で討ち死にをする．義仲の最期は，『義仲はイチビッタ』ということで，賛否両論の講談・後講釈に，イヤというほど汚染されている．それで，もはや真実はどこにあるのか，ほとんど見分けがつけられないほどである．いま，だだっぴろく，しかも南を山にさえぎられ，閉塞感のある琵琶湖の南岸を行くと，『ああ，義仲はずいぶんニヒルな死に方をしたなあ』と，感慨が湧く．しかしそれ以上のことは，『いわく不可解』と言うほかはない．

義仲と頼朝とは，イトコ同士である．男女の場合は，『イトコ同士はカモの味』という．カモは，もちろん，美味いものの代表のヒトツとされている．では男のイトコ同士は，何の味がするのだろう？　いろいろ考えてみたが，どうもわからない．だいたい，なぜ頼朝は，そんなに排他的であるのか？これはよくわかる．

『権力の座につけば，経済は共有しても，権力を共有しようという独裁者はいないから』である．よくわからなければ，こう言い換えるといいだろう．『アメリカ資本主義・民主主義・自由経済の社会には，政治・権力を共有しても，私有財産を共有しようという，カネモチはいない』．まだわからなければ，さらに，こう言えば，きっとよくわかるだろう．『日本物理学会には，他人と『研究アイディア』を『共有（盗用)』しても，『研究業績』を共有し

ようという研究者はいない』ではないかと.【彼らにとって,『研究業績』とは,他人を支配するための『政治権力』にすぎないからである.】

要するに,頼朝はすでに北条の子になりきっていた.そして北条とは,後世の『職業・革命家』のように,『明確に権力奪取ダケ』を狙う,『職業・武士集団』だったのである.これはもちろん,荘園の『経済的利権奪取』を狙う初期のものよりも,はるかに進んだ『時代精神』であった.これが,鎌倉幕府の『成功と滅亡の歴史』のすべてである.

『平山の武者所・季重(すえしげ)』の名前が,平家物語に出てくる所は,『一の谷の合戦』をもって終わりとなる.実は,彼は『平山三代の武将』の一人であるから,その後も記録は多い.しかし平家物語の作者たちは,そんな関東のローカル・ボスのことなど,もはや興味も関心もなかった.

源平両氏が,死力をつくして戦った『一の谷の合戦』は,物語作家の語るような単純な意味あいのものではない.ここで負けた方が,『次の時代の支配権を失う』ことは明確であった.オポチュニストたちにとっては,どちらとも,うかつな賭はできない.平家にとっては,保元・平治以来の盟友である藤原氏と組んだ『起死回生』のチャンスである.藤原氏の実力は,母系に食い込んで以来,営々と『西方に』根を張ってある.平家の一門は,藤原氏の力量・資力・武力を,義仲によって『都落ち』の苦杯を飲まされて以来,目を見張る思いで痛感してきた.『捲土重来』とはこのことである.幸いに,源氏の主力が『義仲追討』に手間取っている間に,一の谷には難攻不落の陣を築くことができた.かの『福原』にも近い.加えて,背後の瀬戸内の水軍(海賊)も,がっちりと平家側についている.平家にとって『言ウコトナイ』チャンスである.

そこへヒョッコリと,義経の軍勢が現れた.海側を進んでゆく主力の範頼の軍にたいして,義経の軍が山側から来たのは,平家の京都進攻計画が山・海の二ルート協同で攻め上ぼる計画だったからだ,というのが妥当であろう.実際は,義経はどこを通ったかなど,わかりはしない.確かに地名は詳しく出ている.だが,そんなことはいくらでも後から書ける.義経の軍勢のリス

トには，平山の名が出ていない．範頼軍の方にもない．彼は参加していないのか？　そんなことはあり得ない．ところが，ヒヨドリ越えの山道で，義経が進路に困ったとき，『私が案内します――お前にわかるはずないではないか――いやわかります――図々しいことをいう奴だ』と，義経に『笑われた』という話を，急に挟んである．これは『視聴者向けサービス』にちがいない．なぜなら，翌日，平山は一の谷の正面攻撃の舞台で，熊谷と二人で，派手な『熊谷・平山・一二の駆』を演ずるからである．（ほぼ）同時刻に，一つの物体が異なる空間を占めることはできない．これは，アインシュタインにも動かせない『古典力学の鉄則』である．ただの，『作り話』のお楽しみである．

『熊谷・平山・一二の駆』のクライマックスはこう語られている：

荒い革の鎧に兜を猪首に着なして，さび月毛なる馬に乗る．鐙ふんばり突っ立ち上がり，『保元・平治両度の合戦に名をあげたる，武蔵の国の住人平山の武者所季重』と名のって，熊谷が先を馳せすぎて，二十三騎がなかへおめいて駆け入る．熊谷これを見て，「平山討たせじ」と続いて駆く．平山駆くれば熊谷続く．熊谷駆くれば平山続く．二十三騎のものどもをなかに取り込めて，火の出づるほどぞ戦いける．さるほどに，成田の五郎も出で来たる．土肥の次郎七千余騎にて押し寄せ，トキをどっとぞつくる．熊谷・平山は引き退いて，駒の息をぞ休めける．

結局，頼朝は一度も京にいっていない．『正四位の下』はもちろん，『二位の位』を出されても，「辞令」を取りに行かない．それはたぶん，『京言葉が少しもわからない』というコンプレックスがあったからであろう．一方の義経は，六条堀川に住んでおり，日常会話も問題なく話せたはずである．『言葉は心の小道である』とは，このことか？

§5 江戸っ子はオポチュニストのドリフターズ

『1805（文化2）年8月，平山正名（まさな）多摩日記抄』という文献がある．まず読んでみよう：

文化2年8月20日，江戸発足．晴天．高井戸村にて中食．府中の宿，松屋に泊まる．21日府中の宿を出，20町ばかりにして，玉川の渡しあり．それより一里にして，高幡村にいたる．祖先，季重君御建立の不動尊を拝す．堂は八間四面，別当は金剛寺という．それより平山村に至り，大福寺に参る．季重君の御墓は，寺の後ろの角にあり．石碑は砕けて，ただ五重塔（五輪塔？）の上のみ置き，砕けし石を周囲に集めあり．早速そのまわりに，玉垣にても拵えたく存じたれど，当所には石工などなく，早速のことには相成りかね，まず木にて造ることに取り計らう．それより仏殿に上がり，御位牌を拝す．大福寺殿高庵伝名大神儀とあり．季重君の御位牌かと老僧に問うに，知らずという．

それより再び庭に出でて，日奉地蔵堂を拝す．当所にては，千体地蔵とも申しおるよしなり．寺の世話人根津恭元と申す者来たりしより，この者に案内いたさせて，丸山に登る．寺より童子二人をつれて，住職も来る．山頂の日奉大明神を参拝す．それより童子の案内にて，浅川という石川徒渡して，八王子の宿にいたり，相州屋と申すに泊る．

22日晴．八王子の宿より五日市の宿．檜原の道は険阻故，江戸よりの供は帰して元右エ門一人を供として，案内一人と共に，石川を渡り，乾の方へ一里半ばかり行き，川口村というにて暫し休み，それより流れに沿うて行き，七八町の山を越し，秋川という川を仮橋にて渡り，五日市の宿に着く．檜原村の千足村を問うに，きわめて山中の由申す．

西に向かって進む．中野村を過ぎ，板橋あり．長四五間あり．渡ればほどなく乙津村に至る．左は高山峨々と聳え，右は秋川の深渓漲り流る．川に添

うて山の半腹を行くに道幅三四尺ばかりのみの所もあり，危険甚だし．また七八間の板橋あり．これより檜原なり．前のごとく川を右に見て行くに，檜原の本村に至る．番所あり．また四間ばかりの板橋を渡る．谷底までは五六丈もあり．また七八町行き板橋を渡り，川を左に見て行くに，四五町にして，千足村に至る．

御霊明神の別当を聞くに，別当は無く，社前の百姓惣左エ門と申す者，鍵を預かり居る由にて，同人方へ参り，同人の案内にて，開扉いたし，御神体を拝するに，風折烏帽子に直垂を召され給う．像の左右に下げ髪の女の御像二体あり．社は彫り物等もあり，念入りの普請なり．境内狭まけれど，大木数本あり．

西方一町ばかりの長泉寺に，先年この寺立替のとき，掘り出せる甲兜は，日奉将軍の御召しとて，この寺に行くに，無住故，寺の世話を致す与右衛門と申す者を呼び，長持ちの中を拝見致すに，兜は六十二間のすじ兜，鎧はぼろぼろに損じ居るも，地中より掘り出せしという説疑わし．かれこれ拝見する間に，日の山の端に傾きしより，名残り惜しくも五日市に帰り，板屋と申すに泊まる．

23日，五日市玉林寺に，先祖の位牌ある由，家の記録ある故，玉林寺を尋ね，住僧に対面す．委細物語り，御位牌を拝す．

実際院殿前平山氏心解了脱居士

玉麟院殿瑞応祥公大禅定居士

御位牌には年月日なし．過去帳を一覧するに，実際院は八月朔日とあり．その他は，ただ開基檀那武州多摩郡檜原城主平山新左衛門尉末重公とあり．他の記録は，先年寺ともに焼失いたせしと申す．ただ御朱印箱入内より，一通取り出したるものあり．それより平井村宗剣寺はいずれなりと聞くに，これより東一里なりと申す．

宗剣寺へ尋ね行き，住僧に対面す．御位牌を拝す．

天正十八年庚寅八月二十三日

当寺開基平井院殿忍雄宗剣大居士

この寺住僧と申し者，初々不思議の者なり．今日は開基居士の祥月命日なり．御子孫の君御参詣奇なることなりと申ししかそうろうに，今日は八月二十三日なり．祥月命日とは不思議のことよと，答えたり．

住僧の申すに，当所は，平山公の旧臣住居致し間，呼び寄せ申すべしとて，やがて両人召し連れ来り，対面．一人は森田五兵衛，木住（きし）野金次郎は八王子住居の由．この他，平井村に平井と申す者あり．また狩宿村清水豊吉と申す者，先祖清水河内の守は平山家の家老の由申し伝う．今夜御宿あらば呼び寄せ申すべしと申すも，帰村の日限先に触出しあり．残念ながら対面出来ず．初寺の後ろの山の半腹に，御墳墓あり．ただ大石を置きたり．また寺の庭に先に住みし僧の建てし，宗剣居士の御石碑あり．

それより寺より西八町ばかりの不動堂へ行き，住持ならびに右両人案内にて，不動を開扉拝す．御丈一尺余の立像なり．この堂の棟札に，当社は永徳元辛酉年平山朝臣守吉公の御願所なり．後文安二年乙丑平山左衛門尉綱景建立なり．

持参せし系図写見せしかば，綱景請公の事蹟細敷処相判りし故，住僧と両人の者も大いに悦び，右事蹟を写し置きたく申しにつき，写し申させたり．寺にて酒肴昼食などを出し，いろいろ物語り，午の下がりにも相成り，暇を告げ，帰村の順路を問う．

桑畑の中を，およそ一里半ばかりゆき，二の宮村に出，玉川の渡しを越え，牛浜という所に出，玉川上水の橋を渡り，一里ばかり行き，また玉川の橋を渡れば砂川村なり．この村，長さ一里半ばかりある由．村の中程より東の方，中野屋という，いぶせき旅籠屋に泊まる．今日は熱して，夏のごとし．（以下略）

ついでにもう一つ読んでおこう．昭和43（1968）年3月10日，毎日新聞に出た記事である．『三多摩風土記（84）』という題で，『金色山大悲願寺・秘仏，古文書など寺宝豊富・美しいハギが仙台から本家返り』という見出しがついている．

五日市線の武蔵増戸駅で下車，五日市街道を五日市に向かって徒歩約20分．街道に沿った古い家並を通り抜けると間もなく，道の左下に秋川の渓流が現れる．このあたり，道の左右に山がせまり，奥多摩の感が深い．

やがて街道の右手に数十段の石段．登りつめ，線路を横切るだらだら坂が終わると真言宗豊山派金色山大悲願寺．山門の奥に観音堂，向かって右手に，広い講堂，庫裏が続く．通用門の前には梅の古木が二十数本，春の遅い奥多摩の梅はまだつぼみも堅く，花の見頃は三月中旬になるという．

大悲願寺の開山は建久二年（1191）〖注・壇ノ浦は1185，奥州平定は1189，鎌倉幕府成立は1192（建久3年）となっている〗．源頼朝が平山季重に命じて造営させたといわれる．本堂を取りまいてうっそうと茂る杉の古木が，寺の古い歴史を物語っている．天正十八年（1590）豊臣秀吉が小田原の北条を攻めた時には，秀吉方の諸将から戦勝祈願を依頼されたこともある．古い街道筋にあったため，入山を制限する寺門保護の禁制が出されたこともあったという．

元禄時代の建築だという古い講堂でもわかるように，むかしは学僧を育てる寺だった．この地方の学問研究の中心地で，山門の二階には回転式の書棚などがあり，図書館としての役割もはたしていたらしい．明治以降は寺子屋形式で近くのこどもたちに住職が英語を教えたものだという．

寺の本尊は千手観音の画像．寺伝によると聖徳太子の画だというが，なが年にわたって護摩をたいたりしたためかすっかり黒ずみ，いたみもひどいという．

観音堂にはこのほか伝阿弥陀三尊像が安置されている．昭和三年指定の旧国宝，重要文化財，いずれも木彫，ウルシ塗りの金ぱく置き坐像．真中の阿弥陀坐像は高さ約八十センチ，藤原末期の制作らしい．両側の観音，勢至（せいし）坐像はこれよりやや小型，鎌倉時代の制作と伝えられている．

いわゆる寺宝の多いお寺で，ここに伝わる大般若経四百六十二冊は都内に保存されている写本のうち，もっとも古いとみられ，昨年十二月二十六日，都重宝に指定されている．このほか不動三尊を木板に半浮彫にした「不動明

王二童子がん像」は，国の重要美術品．たて15センチ，よこ10.5センチの懐中仏，足利時代のものといわれる．

江戸時代の木活字や古文書も多く，徳川家康の朱印状，江戸初期の住職海誉上人が持っていた世界地図なども保存されている．

寺の境内には秋になると白ハギが乱れ咲く．寺を訪れた伊達正宗が領地の仙台にもハギを植えたい，と住職に頼んで移植したといわれ，ハギを所望する正宗の手紙も残っている．その後，仙台のハギは繁殖したが，寺のものは年々少くなり，古いハギは現在一株しか残っていない．このため昭和十九年に宮城県出身で戦時中，同寺に疎開していた相馬黒光さんの世話で新しいハギが仙台から本家返り，前庭いっぱいにふえている．「以上」

前記『平山正名多摩日記』は，千葉県香取郡干潟町鏑木にある『平山本家』の平山忠義氏（近年亡くなった）所蔵の『古文書』によったものである．

鏑木に行くと，思わず噴き出したくなる．なぜなら，その地形が，京王線『平山城址』の，かの「丸山」そっくりだからである．『ハハア，こんな所にまで逃げて来やがって！』．ここには，平山一族の『敗走・敗走・また敗走』の物語がある．簡単に述べると，それはこうである：

嘘か本当か，武蔵七党の『平山一族』は，940（天慶3）年に，武蔵国司となってやって来た『日奉（ひまつり）宗頼』が，日野の東光寺（JR日野駅西約1キロ）付近に住みついた子孫であると自称している．国司という仕事は，「続日本紀」などからも察せられるように，発令されて『下向』することはあっても，戻ることはなかったのではないかと言われている．なぜなら，『戻りの発令』の記録がないからである．彼らは，住みつくほかはなかったのか，あるいは『中央の都がイヤ』で帰りたくないのか，たいていは帰らない．宗頼の一族は，秋川流域に広がり，じきに一門26家をなしたという．彼らは『西党』と称し，宗頼・宗親・宗忠・宗貞・宗綱と続いた後，宗綱の三男『日奉直季』が，『平山に住み』，平山八郎直季となったという．『多摩

日記』に『日奉大明神』とあるのは，彼のことであるという．彼の住居跡は『平山小学校・校庭』となり，『八王子セミナーハウス』なども，彼のテリトリー内と称する．（彼は〖学究派〗だったとみえる．）

日野は，前記『ヒノ・ルノー』のごとく，伝統的に乗り物の産地．平山季重は『馬』に乗って「保元・平治・宇治・一の谷・平泉」と転戦する．武蔵の武将であった彼は，頼朝の命令に従い，公家系バジェットの義経とは別れる．もちろん，『頼朝追討』の挑発にも乗らなかった．鎌倉幕府の開幕前年，五日市に『大悲願寺の建設』を落札する．

鎌倉幕府ができて，平和になると，制服組はいらなくなる．かててくわえて，北条家（小田原の北条とは無縁）というのが『切っての陰謀好き』ときた．たちまち『鎌倉中央』は，『文官・政治家・官僚・学者』の巣窟となった．『文人，たがいに，あい軽ろんず』といって，彼らは昔から，皆，『自分が一番偉い』と思っている．『御家人』という制度ができると，『党』はただの『下働き』となった．それでも，まだ頼朝の生きている間は，時々ヤブサメなどやらせて，制服組との繋がりを思い出してはいた．

鎌倉には生え抜きの文人などいない．一方，京は藤原北家に独占されていた．当然ウダツの上がらない不満分子が大量にいた．そこで，彼らを『京下がりの事務官』として移入した．つまり，アホなことに『西のトラブル』を持ち込んだ．鎌倉武士は皆ソッポを向いた．『鉢の木』だの，『山ノ内一豊の妻』の話は，『武士が，ひどい貧乏暮らしをしていた』という点以外は，下らない作り話である．その証拠には，『大事な盆栽の木を炉にくべて』も，燃えるはずがないではないか？　盆栽はナマ木である．もし火がついたと言うのなら，生活に追われ，手入れが悪くて，とうの昔に枯らしていたからである．

北条時宗という男は，元のフビライと戦うために生まれてきたような男で

ある．幸いに，源平合戦に勝ったとき，西国の藤原の領地を取り上げて，東国連中の論功行賞に当ててあった．それで元が襲来したとき，武士を動員できた．藤原などに任せておいたら，日本の西半分は，富士川まで，たちまち簡単に占領されていたにちがいない．

『北条の策謀』にかかり，多くの家・族が滅ぼされた．新田義貞というのは，どこの誰とも良くわからない武将である．そんな彼が，南北朝の争いに乗じて，打倒鎌倉に乗り出したときには，鎌倉幕府のために戦おうなどという勢力は，関東平野にはなかった．武蔵七党にとっても，鎌倉の北条のために命を捨てるつもりなど，さらさらなかった．

関東平野には，『イザ鎌倉』という場合に備えて，南北に走るたくさんの騎馬道が造られ，みな『鎌倉街道』と呼ばれていた．しかし，いったん守備にまわった鎌倉には，防衛上の弱点がある．それは，多摩川を越えられると，もはや「鎌倉の切り通し」まで，『防衛線がない』ことである．鎌倉街道は，今や，鎌倉攻撃の絶好のルートとなった．

義貞は稲村が崎から攻め込んだ，などという話は，極めて疑わしい．確かに，春の大潮の日には，鎌倉付近には驚くほどの干潟が出る．しかし，稲村が崎付近は，当時の地形とはまったく変わっているので，勝手な想像は危険である．ましてや，彼が剣を海に投じたなどというのは，作り話であろう．稲村が崎付近には，かつては大量の砂鉄があった．『どうしてここの砂浜は黒いのだろう』と，いつも不思議に思った．やがてそれが砂鉄であり，その砂鉄は滑川の上流からくることを知った．長い年月（おそらく数百年）をかけて，波が洗って砂と鉄とを分けた．しかし，戦時中にその砂鉄まで採掘され，現在ではただの砂浜となってしまった．砂浜が再び黒くなるには，また数百年を要するであろう．

砂鉄の取れる所には，刀鍛冶が存在する．鎌倉にも『鎌倉鍛冶』ができた．それで，しいてこじつければ，稲村が崎に干潟が発生する秘密は，砂鉄を取りにくる刀鍛冶から得た情報ではなかったか，と想像される．もしそうだとすれば，『義貞が，刀を海神に献上した』という話も，『筋の通った』話とな

る．

砂鉄から刀を造る『秘法』は，古代からのものと思われる．前にも書いたとおり，鉄を熔かせないので，高純度の材料から出発する必要がある．砂鉄は原材料として絶品である．事実，造られた刀は100％近い純度である．ここにも『刀剣の秘密』がある．

鉄をハガネにするには，炭素を加える必要がある．木炭を使う刀鍛冶にとって，実にラッキーなことであった．彼らは，ハガネを『鍛える』ために，トンテン・トンテンと叩く．戦後，欧米でディスロケーションが発表されると，『刀鍛冶が刀を鍛えるのは，ディスロケーション・ネットを造るためだった』などと大学で講義した．東大理学部物理教室の授業なんて『ソノ程度』である．実は，でき上がりの刀剣は，鉄の純度が上がっているだけではなく，重さも出発材料の50％にも減っている．これは，何度も加熱して叩いて，文字どおり『不純物を叩き出した』からである．何度も火にくべ直し，『熱による不純物拡散を促す』．剥がれ落ちたクズ鉄は，集めて研磨粉にする．実に無駄がない．

戦国時代になると，大菩薩峠・小仏峠を越えて武田のスパイが潜入し，圧力を掛けてくる．小田原にセンターを置く北条が，箱根・相模を制圧し，多摩川に迫る．太田道灌などという『どこの馬の骨ともわからぬ男』が現れて，「江戸城を造ったこともあった」というが，何の戦さもしないうちに，御当人は，多摩丘陵の西側の，丹沢に近い『伊勢原の他人の邸』で毒殺されてしまった．鎌倉の下働きに懲りていた『武蔵党』の面々は，『別な北条』であろうと，『もう人に使われるのはイヤダ』というわけで，関東平野の北・東に，昔の源氏のよしみを頼って逃走をはじめた．

やがて，豊臣秀吉に追われた北条が，彼らを追って後に迫る．彼らはさらに，『文化果つる所』へと逃走する．ついに，『関ヶ原で勝ったから』と称して，徳川家康が『江戸お討入り』にやってきた．岡崎という，中途半端なところに育った彼は，京都に行く選択肢もあったのだが，『江戸城の方が石が

たくさんある（当時の石は財産ですからね）』という，経済主義の金権欲が先行して，『江戸を選んだ』.「江戸は北条が良く治めていたので，どんな抵抗に遭うかわからない．京都の方が安全です」と，臣下がいさめたと言うが，家康の方が，『江戸のオポチュニズム』を良く見抜いていた．それでも，『捨てた京都も惜しい』ので，伏見城の石と櫓は取り上げて，江戸城に持ってこさせた．

千葉氏を頼って房総に逃げ込んだ『残党』は，市川国府台（こうのだい）に『最後の一戦』を挑み，敗北した．国府台も，縄文以来のゆかりの土地である．敗北した残党一味はさらに東へ，房総の果て・九十九里にまで落ち延びた．『干潟町』という地名が，何よりその実態を表している．刀を取り上げられた彼らは，昔の寺の繋がりを頼って，先祖の墓を鏑木の妙経寺に集めた．そこを『本家の菩提寺』と称し，三百坪ほどの墓域に，五輪塔をコの字型に林立させている．

やがて，江戸幕府が倒れ，新政府ができると，彼らはシメタと思った．『今度の政府は，味方をしてくれるだろう』と錯覚した一人が，自分の分け前の田畑を処分して，小金を作り，旧江戸に出た．そのとき，自分の墓地の分だけは残したという．『自分の墓地』というのが，『日陰の三千坪』あったというから，かなりの資金を作ったにちがいない．

出てみると，江戸は見る影もなく荒れ果てていた．百文あれば，ミジメな最低の葬儀が出せると，その滑稽さが落語にもなっている，旧通貨体制下での江戸の生活は，新政府のハイパー・インフレ政策で，完全に粉砕されていた．百文は一銭にもあたらない．一銭の百倍が一円で，政府要人は円単位の生活をしている．十六文で食べられた庶民の『時ソバ』の落語など，遠いユメ物語である．『(一銭に）チョット足りない』というサゲで，頭の悪い人を『天保銭（百文銭)』などとシャレてみても，地場産業が完全に崩壊している所では，町人は生活に困窮する．当然，彼らは『国へ逃げ帰る』．他方の武家屋敷は，住人が追放され，空き家は荒れ果てる．『虎が出る』と言われた

日比谷の暗黒の野原の一角には，ガス灯をつけた『鹿鳴館』だけが明るい．そこでは『夜会服の貴婦人』がダンスをする．彼女らのむき出しの背中には，大きなお灸の跡が，二列に並んでいた．

小金を作った『平山芳樹』は，町人に解放された『牡蠣殻町』に『政商』を営む．そこを狙って，わが『中央商業』が開校するなど，荒れ果てた武家屋敷跡地の牡蠣殻町には町の生活が始まる．政商となった彼は，当時の交通の要衝・大井町（まち）にも拠点をつくり，また京都にも用をつくって，足しげく上る（当然イイ人もつくった）．やがて，政権の中心の『山県一族』にも近づき，かなり得意な人生が開けた（かにみえた）．写真を見ると，たしかに『丸に二引き・七つ割り』の紋付きを着て，得意そうに写っている．

ここで，銭・金（ぜに・かね）の話をちょっとしておこう．小判を『かね』といい，それ以下の通貨を『ぜに』という．江戸っ子の典型的なタンカ（の一つ）とされている，『宵越しのゼニなど持つか！　お天とうさまと，お米のメシは，どこへ行っても付いて来らア！』という（下品な）セリフは，「火事の絶えない，それで景気の良い，大工・職人のものである」などと，『解説』がなされる．ウッソー！『オレは手に職（技術）があるから，明日の心配などしない』という，一流のヤセガマン・ハッタリである．

実は，彼は〖ゼニ〗と言ったのであり，〖カネ〗と言ってないところがミソである．カネ・つまり小判ならば，もっと大事にしたにちがいない．ここを突いて，『江戸っ子の，生まれ損ないカネを貯め』という川柳がある．『小判ヤッタラ，宵越しにナサッタでしょうなア！（カタカナは，上方のアクセントをしめす）』という，上方落語のマクラもある．『あいつは，カネモチだ』と言い，『奴はゼニモチだ』とは言わない．

江戸時代の通貨は，二系統であった．信じられまいが，（理論上）ぜに・かねは相互に乗り入れしない．町人は銭で暮らし，武士は金で暮らす．したがって，武士は小銭を持たず，ツケで暮らす．カネ（両）のシステムは二進法である．一両の半分を二分金（にぶ金）という．ハーフ・ダラー，つまりケネディ・コインにあたる．更にその半分を一分金（いちぶ金）という．つ

Esaki
TOKIO, JAPAN.
大日本
崎江
東京麻布区公園地

〔表〕

明治参拾参年如月写之
Esaki
崎江禮二製
PHOTOGRAPHER
TOKIO, JAPAN
平山芳樹
山縣嘉孟

〔裏〕

まり一両の1/4で，クオーター・ダラーにあたる．そのまた半分を，二朱銀（にしゅ銀）といい，1/8 両，更にそのまた半分を，一朱銀（いっしゅ銀）と言い，1/16両となる．ここまでの材料は金・銀・の合金，つまりカネである．

いっぽう，庶民は『銭・ゼニ・ビタセン』で暮らす．『ビタ一文貰ってない！』などと言い，文（もん）が単位である．4000文（枚）を一両とするので，カネの最小単位の一朱は，4000/16＝250文（枚）になる．〖ついでに，1000文を一貫文（いっかん）と言う．〗どこにも不都合はないように見える．実は，金は幕府の決める政令通貨であるが，『銀は秤量通貨』であった．したがって『銀の相場』によって，『一朱はナンモン』と決まる．『両替』という商売は，ここを狙った商売で，手数料は別に取る．今日，『一万円札を両替してくれ』などというのは，本当はイミがない．大阪では，銀は昔から商品であったから，今でも銀貨の実勢価格が表示価格を上回れば，鋳潰される危険がある．また，時々出る古文書に，軍資金何千両とあり，それに並んで，何千貫などと別記のあるのは，庶民の金も集めたということを示している．天保銭は百文であり，新政府になると，それがたった八厘（8リン，0.8銭）にしかならなかった．それで，『天保銭』より頭の悪い人のことを，『あいつは七輪（シチリン，火おこし，カンテキ）だ』と言う．

平山芳樹（よしき）が，得意になって見せびらかしている羽織の紋所は，『丸に二引き，七つ割り』という．これは，普通には『丸に二引き』としか言わない．平家物語には，紋所の話はなかった．平家の赤旗・源氏の白旗と言うだけである．紋所は，後世になり，大軍が乱戦するようになったとき，自分たちの目印にするために発明したと考えられる．もちろん，もっと後では，『総大将のお目に止める』ためであろう．とにかく，『簡単・明瞭』であることが，実戦上必要である．島津の『丸に十の字』，真田の『六文銭』などは，その典型である．実は，『丸に二引き』の使用者は平山に限らない．「カッコイイ」と思えば，すぐに取り入れるのは，昔から日本人の常である．今日では，ウエッディング・ドレス合わせて，新郎の羽織り・はかまを作るときには，カップルで紋所のカタログをみて，『これがいいわ・これにしま

しょ』と決めるというではないか.

『簡単・単純・明瞭』でない紋所ほど，後世になって作ったものである．二回対称よりは三回対称．それよりも，『全然対称性のないもの』などの方が高級だと思うらしい．公家の紋，徳川の『三つ葵』など，みなそうである．『三つ葵』など，『目に入らぬか』と言われても，無理はない．よほどそばに寄らなければ，誰の紋かわからない．

『丸に二引き』を，さらに区別するのが，『七つ割り』である．丸の中に二本の横線を引く．すると『白黒・合計七つの領域』に分れる．その線の幅を，同じ太さになるように描くのである．これは，偽物を見破るだけでなく，戦場に転がっている誰ともわからぬ死体が，平山一族かどうかを判断するためでもあった．たとえば，トロントの博物館で，偶然『丸に二引き』の兜を見た．驚いた．誰がこんなものを（売り渡したか），と思ったが，『七つ割り』でないことがすぐにわかった．

しかし，ここに問題がある．『七は素数である』．したがって，最初から七の倍数の大きさの直径で，丸を描けば何でもない．しかし，この大きさで『七つ割り』の紋を描いてくれ，と言われると，割り切れない場合が出る．『素数七の逆数は，六桁の循環小数になる』．果たして，平山一族は，そんな精度のディバイダーを持っていたか．そもそも，循環小数に気が付いていたか．刀剣の制作にあたり，あれだけの秘法を生み出した，わが国のエンジニアたちと並んで，誇るに足るほどの数学者は，ついに生まれなかったのではないか？　エジプト人がすでに知っていたと言う分数を，いったいいつ『自力で発見したのか（あるいはできなかったのか）』．平山一族は，惜しいドジョウを逃がした，と言うべきだ．

平山芳樹の努力にもかかわらず，商売は成功とは言えない．今日では，明らかになっているように，三井・三菱などの『特別の政商』以外は，結局『財産を巻き上げられ』，損をして，没落していった．芳樹の場合には，決定的な損害を被る前に，関東大震災がきた．『焼け跡に【所有権】が残るなんて知らなかった』というわけで，『知らぬ間に，土地を全部番頭に取られて

いた』．後には『決して，番頭を信用してはいけないよ』という家訓だけが残った．わずかの動産は，不況の銀行閉鎖で紙屑になった．それで，一族のなかに『金儲けをしよう』などと思うものは一人もいなくなった．そのかわり，『人の好意は，金では買えない』という，シャンソンでは常識のルフレーンを自力で発見していた．

『江戸から東京へ』『虹の架け橋を渡って，世のなかが動いた』とか，『江戸時代は言われるほど悪くなかった．悪くだけ言うのは一方的宣伝だ』などという『学説』ほど，笑わせるものはない．どちらもロクナモノではなかった．8月15日，その新政府も壊滅したとき，一族のなかに，『こんどこそ』などと幻想を抱く者は，もう誰もいなかった．

ある日，『平山城址』に何人かが集まり，誰かがムニャムニャと式辞を述べると，『土地の由来』を書いた立て札を立てた．その後は，みんな散り散りにいなくなった．筆者の中学からの友人に，土地・不動産業をやっている人がいる．彼の話によると，『東京には〖西方極楽浄土信仰〗というものがある』のだそうである．『皆，西へ西へと住みたがる』のだという．そう言われれば，うなずける．中央線は，立川から曲がり，青梅（おうめ）まで東京から直通で行くものが作られた．青梅・特別快速という．いくら青梅・五日市と住み込んでみても，大菩薩峠があるのに，と思っていた．第一，青梅は急な坂が多くて，自転車には不便で，若い人でなければ住めないという噂もある．

一方の小仏峠には，前からトンネルがあるが，とうとうトンネルを抜けて，山梨まで行く直通の通勤電車ができた．〖極楽浄土信仰を貫いて〗トンネルを抜けるのもいいだろう．しかし，平山一族の先祖が武蔵を逃げ出したのは，ずいぶん古い話だから，誰もいまさら，『先祖の地に戻ろう』などと言うものはいなかった．その反対に，ふと気が付くと，彼らは『東へ東へと，さらに敗走を続けていた』．転機は戦時中にあった．鏑木の本家に，ある晩，三機の戦闘機が，ひそかに手押しで届いた．本土決戦に備えて，敷地のなかの林に隠しておいてくれという．それを見て，彼らの気持ちは決まったらし

い．

【そうだ，これからの『乗り物』は『航空機』だ．乗り物がなければ，いやでもウジウジと，同じ所で暮らすほかはない．日本人の心は，もうよくわかった．これからは，外国に逃げ出すほかはあるまい．】

気が付くと，一人は，まだ滑走路もない，成田の空港公団に勤めていた．一人は，ノース・ウエスト航空に勤めていた．アメリカ西海岸のシアトルに住んでいて，時々，家族連れの休暇で日本に来た．やがて大陸・中央部のシカゴに転勤した．めったに来なくなった．『ぼくはどこでも，しばらくいると，そこが好きになっちゃって』と，ゾッとするようなことを言った．一人は，ソニーの研究所でハンダゴテを握っていた．一人は，ドイツ人の経営する貿易事務所に勤めていた．ドイツ語の手紙には，ミスターの代わりにヘルンと書く．それで，『ドイツ人は，なんてヘルンという人が多いんだろうと思った』という女モサである．老カップルは，武蔵小金井を捨てて，千葉の稲毛に移った．一人は戸田（へた）の緒明（おあき）の娘と結婚した．船も乗り物だ．一人は，アメリカを通過してヨーロッパにまで行くという．期せずして一斉の脱出である．誰一人として，国立大学の教授・一流企業の重役・大銀行の頭取・大企業の下請け会社の社長など，政治家・学者・文人・官僚になったものはいない．いったい彼らは江戸っ子か？　とんでもない！

ある日，近くで，オバサンと植木屋の子が話しているのが聞こえてきた：

オバサン，江戸っ子だってね．ぼくもそうだよ！――フーン，どこの江戸っ子？　東村山！――江戸も広くなったからねえ！

笑ってはいけない．東村山はまさしく東京都であり，埼玉県ではない．しかも，彼の言っていることは正しいのである．江戸っ子というのは，親・子・孫の三代を江戸で暮らした者を言うと，俗説に言う．しかも，厳密には，

上野・品川の間の『下町』に住む町人・職人に限る．上野以西の台地に住む者は，ここを『山の手』というので，『ノテ』と軽蔑を込めて呼ばれる．なぜか？　それは，山の手は，武士・大商人など，一時滞在の高給所得者が住む所だからである．では，『本当の江戸っ子』はと言うと，ほとんどは，徳川家康の『江戸お討入り』のときに，近在から集められて，むりに連れてこられた民百姓の子孫なのである．したがって，東村山には，『新政府になって，生活が成り立たず，江戸から古巣に逃げ帰った江戸っ子』がいたとしても，不思議はないのである．

『でも，職人・芸人が居たじゃないか』と言いたいのであろう．しかし，彼らはほとんど大阪から来たのである．もともと，『江戸の下町』になど，人が住んでいなかった．あそこは埋め立て地なのである．人がいなければ，文化などない．言葉もない．もともと，『江戸の言葉』などと言うものは，実は，まったくと言っていいほど存在しないのである．ほとんどが，大阪から来た，大阪の言葉である．

大阪は食い気の張った所で，食い気とは文化の主要形態であるから，まず食べ物の話から始めよう．【アンコロ・ボタモチ・オハギ・ダンゴ・デンガク・酒呑みならば，ノンダクレ】，みな大阪伝来の言葉である．当たり前であろう．『存在しないものに，普通名詞が先につくわけがない』からである．では，『状態』ならどうか．【テレカクシ・ヘバリツク・ノロマ】など切りがない．まだ承知できないと言うのなら，切り札を一枚．だいたい，『タンカヲキル』という言い方自体が，『大阪言葉』である．これでも，まだゲームを続ける気なら，こちらもエースを出そう．

『大阪サカイに，京ドスカ，長崎バッテン，江戸ベラボー』という．その『ベラボーめ！　ベラボーな話！』という『ベラボー』が，『大阪言葉』である．『ベラボーとは何か？』実は，高校以来，耳をそばだててきた．その結果，二つのデータベースができていた．一つは高校の教師からで，『ベラボーとはコエタゴに入っている，オワイをかき混ぜる棒である』と言った．汚らしい話であるが，昔は有機肥料に人糞を腐熟させて使ったので，それをか

き混ぜる棒であるという．『オマエはこんなに汚い奴だ』という意味だという．ちなみに彼の授業は，学校農園の農業実習であった．大学時代には歌舞伎通の友人がこう言った．『ベラボーとは，職人がメシ粒を潰して糊を作るときに使う，ヘラのことである』．心は，『ヘラでメシツブを潰す．つまりゴクツブシ！　ということだ』と言った．でき過ぎている．こちらは『大阪言葉辞典』を出典にしている．もうアキラメナサイ．

それにしても，東京の言葉には，大阪のアクセントが残っていないではないか，と言いたいのでしょう．それも考えた．まず第一に，日本語には『アクセント』はない．アクセントとは『音の強・弱』であり，日本語にあるのは，『音程の高・低』である．それが，一つひとつの『単語のなか』にあり，さらに単語がつながった『文章全体の上』にある．フランス語と同じである．それで，日本語を初めて聞いた外国人は，『歌を聞いているようだ』と言った．それが実にイヤラシイほど，平板になってきた．まるで，アクセント・レスのお経を聞くようだ．電車に乗っていても，ウンザリする．中央線・山手線・総武線・常磐線のなかでの会話なぞ，みな聞くに耐えない．『山の手の女の人』が話していた，あの滑らかなイントネーションが聞けるのなら，どこにでも行く！　と思う．なぜ平板に話すかといえば，それは簡単である．『お国なまりが隠せる』からである．その主犯はNHKと，JRのアナウンスである．かつては，『橋の・端を歩いて・箸を買いに行きました』とか，『潮が・退いたら・潮干狩り』などと，江戸っ子泣かせのテストがあったという．それはみなサベツだ，と言うらしい．イヤな時代だ．今では『私が』と言うときのフランス語なみの『鼻濁音』など，学校で矯正されるというから恐れ入る．

実は日本語だけではない．一昨年アメリカにいて，一週間で平板なイントネーションの会話にうんざりした．帰ると，シャンソンを聞きまくった．昔はこんなじゃなかった．アメリカでも，若い人の話す，非個性的な，イントネーション・レスの会話は，聞くに堪えない．気取っていうわけではない．実に疲れるのである．

そのとき，朝のレストランで不思議な言語を聞いた．アジア人が二人で話している．声は良く聞こえるが，音が聞き取れない．何語だろうと，耳をそばだてること約15分，ついにそれが日本語であるとわかったときの驚き！関西の読者には悪いが，音も，声も，イントネーションも，聞いたこともないほど汚い，関西の言語であった．かつて，神戸・大阪の人たちの会話を聞いていたとき，フランス語の会話かと，マサカ・マサカと耳を疑ったことがある．もっとも，それは『御婦人同士』の会話であり，アメリカで聞いたのは，『野郎同士』であったのだけれども．

要するに，アクセント・イントネーションなどというものは，『一代で消え失せる』ということを，いま目の前に（耳の横にというべきか）しているに過ぎない．アメリカだって，二世・三世は，完璧なアメ語をしゃべっている．江戸時代にも同じことが起こったのであろう．『下品なべらんめえ口調』など，自慢にならない．われわれは，そんなものから逃げ出したいので，逃走を続けているだけだ．

『東にばかり行ったのでは，元に戻るだろう』と言いたいのでしょう．そんなことはない．希望はある．『人工衛星は，いつだって東回りに打ち上げる．西回りで打ち上げるバカはいない．おかげで，われわれの心は，もう遠い遠い彼方に行っている』．

完・3/12/99・記す